Precious Melody

七海くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｒｅｃｉｏｕｓ　Ｍｅｌｏｄｙ

【Ｎコード】
Ｎ１１９４Ｏ

【作者名】
七海くれは

【あらすじ】
あの時の彼は、今どこに――。

将来が見えないまま大学へと進学した、手塚周一。
その排他的な性格を嘆く、上原芽衣。
悩み、考え抜いた彼女の出した答え、それは……。

誰もが夢見る『Ｐｒｅｃｉｏｕｓ　Ｍｅｌｏｄｙ』を捜し求める青春ストーリー。
すべてはここから、始まった。

序章：Beginning Wind

「あ……あるじゃねぇか！　あったよマジで！　うっわ、信じられねぇ……」
「やったじゃんシュウ！　これでアンタも大学生じゃん？」
「別に、これといってやりたい事なんてないんだけどな。そういうみさきは合格してたのか？」
「アタシ？　当然じゃん！　もう見てきたあとよ」
合格発表の会場は人ごみが形成されるのが一般的であり、ここ私立牧田海浜大学、通称牧浜大学もそうであった。
とはいえ現在は電話やインターネットなどでも合否が分かるようになったので、以前ほどの賑わいは影を潜めている。
そんな中でも自分の合否をより身近に感じたいと思う学生も少なからずおり、そんな彼らもまたそのような考え方であった。
シュウと呼ばれた彼……名を手塚周一という。
彼はこの大学の経済学部に合格したのだが、特に経済の事に興味があったわけではない。
知り合いが何人か受けるという理由のみでただ何となく受けてみたところ、合格したという。
そんな彼の知り合いの一人である原田みさきもまた、この大学の文学部に合格していた。先程の言葉から、かなりの自信家である事が伺える。
「あっ、そーそー！　さっき番号見てきた時なんだけど、おもしろいカップル見つけちゃったのよねー。聞きたいでしょ？」
「興味ない。言いたいなら勝手に言え」
「彼氏の方が、彼女になんか知らないけど酷いこと言っちゃったみたいで、必死に弁解してたのよ。その時の彼氏くんの慌てようといったらもう！　最高じゃん？」
「じゃんじゃねぇよ。そんなの俺が知るかよ。やりたいようにやら

せときゃよくねぇ？」
「はぁ……。何だってアンタってそんな無関心なんだろーね」

そのような他愛の無いやりとりを続けながら歩を進めるうちに、キャンパスの出入り口が近づいてきた。
そこには彼らを待っていたかのように、数人の男女が立っている。
「シュウ！　みさき！　どうだった？」
まずは長身の青年が駆け寄りながら声をかける。
「圭輔じゃんか。お前ら、わざわざ来てくれたのかよ。そんな事までしなくたっていいのに」
と、周一が呼んだ青年……秋野圭輔はだいぶ前にとある専門学校への合格を決めていた、周一たちの友人である。
様々な物事に詳しく、話し始めると止まらなくなる事もしばしばあるが、自分のやりたい事の為にはどんな苦労も惜しまない一本気な男である。
「そんで？　結果はどうだったんだ？」
「だから……落ちてる奴が普通の顔してるわけないだろ。合格してたに決まってるじゃねぇか」
「本当か！？　やったじゃないか！　これでおれら全員、進路決定ってことだな。おめでとう！」
今度は、見るからにスポーツマンタイプの青年が周一の肩を叩きながら祝福する。
「シュウくん、みさきちゃん、よかったね！　おめでと！」
それと同時に、その青年の後方から響くか細い声。その声の主は、彼と頭一つ半は身長差がありそうな小柄な少女であった。
「和也に、ともちゃんまで来てくれたんだ！　来るんなら連絡のひとつくらい入れなさいよねー！」
その彼……中村和也は中学時代、学生テニスの全国トップ選手であった。

だが、中学3年生の全国大会で肘を故障してしまい、志半ばで断念せざるを得なかったという過去を持つ。
懸命なリハビリの結果、現在は肩慣らし程度には出来るほどまで回復している。
このままテニスが出来ていたならプロを目指すつもりでいた彼は、体育系の大学への合格が決まっていた。
そんな彼には交際中の彼女がいる。先程みさきがともちゃんと呼んだ少女……中川都萌である。
彼女もまた中学時代、学生テニスの全国トップ選手であり、中学3年生の全国大会においては全国制覇を成し遂げたのだ。
そんな彼女だが、高校では何故かスッパリとテニスをやめてしまい、現在は名のある女子大への進学を確定させていた。
「ハハハ……悪い悪い。でも、提案したのは圭輔だぜ？　おれじゃこんな悪知恵思いつかないよ」
「コラコラ！　悪知恵ってなんだよ和也！　オレの綿密な計画を悪知恵ってお前、ひっでぇ！」
「どこが綿密だっての。そんなの俺らに連絡入れないで来ればいいだけの話だろ？」
「そ、そうだけどさシュウ……」
「そうだろ？　じゃそれでよくねぇ？」
「……」
周一の言葉に、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かばせる圭輔。
彼の性格はこういうものだと分かっているとは言え、やはり釈然としないものがあるのだろう。
そんな微妙な空気の中、みさきが一人声を張り上げた。
「あーもう！　せっかく合格したってのにこんなんじゃ全然実感湧かないじゃーん！　ねね？　これからみんなでどっか行くべ！　アタシらの合格おめでとー！　ってな感じでさー？」
「そうだよね。わたしもそれがいいと思うな。和也くんもいいよね

？」
「そうだな。それもお前の綿密な計画とやらに入ってるんだろ圭輔？」
「お、おう。そうだよ和也。お前よー、そういう大切な事は早く言って欲しいもんなんだけどなー」
「よーし決まり！　そんじゃ早速しゅっぱーつ！　……っと、ちょい待ち！　シュウ！　確か芽衣ちゃんもここ受けてなかったっけ？」
思い出したようにみさきが聞くが、周一はあまり関心のない様子でこう返す。
「あー……そうだったっけ？　忘れちまった。でもよくねぇ？　別に」
みさきの言う彼女……上原芽衣とは彼らの知り合いの一人である。大学の最寄り駅である西牧田駅周辺の繁華街。彼らの出会いはここだった。
彼女はある日、駅周辺の路地裏において不良たちに絡まれていたのだが、偶然通りかかった周一たちに助けられていた。
「へー、芽衣ちゃんもここ受けてたんだぁ。んじゃーさ、探して誘っちゃおうぜ！　大勢の方が楽しいし、な？　というわけでシュウ、連絡入れてくれや」
と、圭輔が軽く周一を促す。
「なんで俺なんだよ……めんどくせぇ。まぁ、別にいいか」
かなり面倒くさそうに納得する周一。
彼は自分の意見を持たないために、他人に促されないとほとんど行動を起こそうとしないのだ。
ポケットから気だるそうに携帯電話を取り出し、だらだらと操作をする。
口調と行動が全く伴っていないが、それはこの場にいる全員が納得している事なのである。
そして、電話での呼び出しはコール音を一度鳴らしただけの、いわゆるワン切りであった。

「はぁ……。やっぱそれしかしないんだなお前って奴は……」
呆れながら和也が漏らす。周一はこの時も表情一つ変えることなく返す。
「あいつの性格からして、こうしときゃすぐ電話かメールしてくるんだよ。俺バイトしてねぇし、携帯代は極力抑えときたいわけ。別にいいだろ？」
この『別にいいだろ？』というのは、もはや彼の口癖のようなものである。
彼はこれまでの出来事も、常にこの口癖で切り抜けてきたと豪語している。

その時、周一の予測通りに彼の携帯に着信が入る。その主はやはり芽衣であった。
「おう、芽衣か？　今どこにいる？」
「ボク？　ボクはね、教養学部の掲示板のとこにいるよ。シュウくんは？」
「俺らは入り口だぞ。って、お前まだそこにいたのかよ……。どんだけだよ」
「放っといてよー。合格の喜びってのを噛みしめたかったんだよ。……ってちょっと待って？　今、俺らって言ったよね？　他に誰かいるの？」
「ああ。俺のほかに圭輔と和也、みさきとともちゃんがな」
「ちょっとー！　みんないるんじゃーん！　入り口だね？　すぐボクも行くから待ってて！　じゃーね！」
そう言うと芽衣は通話を切ってしまった。
「芽衣ちゃん何だって？」
と、みさきが周一の顔を覗き込むように聞く。
「あー……アイツならみんないるって言ったら、すぐ来るから待ってろだと」
「芽衣ちゃんに会うのって久しぶりだね、和也くん？」

「お……おう。そうだな」
都萌が和也の服の袖を掴みながら聞く。
その時、駆け足でこちらに向かってくる少女の姿を全員が確認した。芽衣本人である。
「はぁ……はぁ……。みんなお待っとう！」
息を切らせながら芽衣が言う。その声に最も早く反応したみさきはいきなり芽衣に抱きついた。
「芽衣ちゃんひっさしぶりー！　元気だったー？」
「うん！　嬉しいなぁ、久々に会えて」
芽衣の方も動じる事なく、久々の再会を喜び合っていた。
「おーおー、仲の良いことで」
「いいなぁ～……」
抱き合う2人を、うらやましそうに眺める都萌。
芽衣はそんな彼女を気にかけ、こちらに誘った。
「ともちゃんもおいでよ！」
「えっ……いいの？　ありがとっ！」
芽衣に促されながら、都萌も芽衣と抱擁をする。
しかし、都萌は小柄なので、芽衣はかなり前かがみになる必要があったのだが。
「うーむ。やっぱ女の子同士ってのはいいんだろうなぁ」
と、遠くを見つめながら圭輔がつぶやく。
「なーにたそがれちまってんだよ圭輔。羨ましいのか？」
そんな圭輔に、和也が尋ねる。
「そんなのどうだってよくねぇ？　やりたいようにやらせとけばいいんだよ」
周一は相変わらず、我関せずといった態度を取るばかりであった。
「あっ、いっけなーい！　男どものこと放っといてたね」
ふと我に返ったみさきが言う。それまで抱き合っていた都萌や芽衣もその声にはっとした。
そして芽衣は男性陣のほうに駆け寄り、改めて挨拶をした。

「シュウくん、和也くん、圭輔くん、お久しぶり！　元気だった？」
「オレらはこの通りみんな元気だよ！　芽衣ちゃんも元気そうで何よりだよ」
圭輔は芽衣の言葉を聞くやいなや、一歩前に歩み寄り代表して言葉を返す。
「えへへー、ありがと。それで、みんなはこれからどうするの？」
「あのねー、これからアタシらの合格おめでとー！　ってな感じでどっか行こうかって事になってたのよー」
と、芽衣のもとに歩み寄りながらみさきが言う。
すると芽衣は思い出したように受け答える。
「ボクも出ていいの？　いいんだったらちょっといいお店知ってるんだー。そこ行こうよ！」
大学に通うために、単身地元から引っ越してきた芽衣は、一人暮らしの自宅のあるこの近辺の街並をすべて把握していたのだ。
その知識はもはや、地元人のそれを凌ぐほどであろう。
「ふーん、やるじゃん。じゃそこでいいだろ」
ぶっきらぼうに周一が言う。しかし、彼がこうして他人を認めるような発言をするのは極めて珍しいことであった。
「オッケー。じゃーそこにけってーい！」
みさきの元気な声が響いたのを合図に、彼らは目的地に向かって歩き始めた。

ここから彼らの新しい生活が始まってゆく。
2月のわりにあたたかな、物事の始まりを告げるかの如く吹き始めた風と共に。

第１章：Ｉｎｖｉｔａｔｉｏｎ

「えー、であるからして、その……」
講堂内に低く響く、学長らしき人物の言葉。
このようなテンプレート通りの言い回しをしてくると、いったい誰が予想しただろうか。
現在は私立牧田海浜大学、通称牧浜大学の入学式の最中であった。
もちろん周一やみさき、そして芽衣もこの場にいる。
学部が違う為に、全員の座席は別々であるが。

みな、神妙な面持ちで学長の言葉に聞き入っている。物音など、ほとんどしていない。
しかし、その沈黙も長くは続かなかった。
どこからともなく聞こえてきた寝息によって、その沈黙は打ち破られる事となった。
式が始まってからすでに３０分は経過していると思われたその時、ついに眠ってしまう者が現れてしまったのだ。
その問題の中心人物は、みさきのすぐ前方に座っていた青年。
隣に座っている彼女らしき小柄な少女が彼を起こしているようだが、全く動じる事はなく眠り続けている。
見かねたみさきは、その青年のみぞおちのあたりに一撃を見舞う。

とは言っても実際に殴ったわけではなく、指先でつついただけなのだが。
「ｑｗｓでｆｒｇｔｈｙじゅいこｌ！？」
しかし、みさきの一撃がよほど応えたのか、その青年は何とも情けない声を発しながら覚醒した。
その声は話を続けている学長の話の腰を折るほどであった。
「ったく……どこのどいつだよ、こんな席で堂々と爆睡ぶっこける

チャレンジャーな奴は。でも……羨ましいぜ」
周一はそんな事を考えながら、何事もなかったかのように話を再開した学長を見ていた。

結局、一時間以上も続いた入学式はようやく終わりを告げた。
これより一斉退場となるが、学生の数が多いためか学部ごとに退場する流れになっているようだ。
まず始めに退場していくのは、周一のいる経済学部だ。彼らが一番始めに退場した理由は、出入口から最も遠い位置に座っていたからであろう。
そうなると、最も入り口から近いみさき達の文学部は一番最後に退場する事になりそうだ。
退場まで時間がかかると踏んだみさきは、先程の青年の所へ歩み寄った。
「ゴメンねー！　痛かったっしょ？」
一応謝罪のつもりだろうが、表情からはその態度は微塵も感じられない。
青年の傍らに立っていた少女は、戸惑いながらもみさきに声をかける。
「えっと……起こしてくれてありがとっ♪」
どうやらみさきに感謝してもいるようだ。しかし、彼の方は釈然としない表情だ。そして、まだ眠そうでもあった。
「もーまったく！　こんなかわいい彼女に起こされても起きないなんて、アンタどーかしてんじゃん？」
みさきは彼の方に向き直りこう言い放った。
寝起きの彼はより一層険しい表情を見せていた……が、その青年は何故か含み笑いを浮かべながらこう言った。
「か、彼女ぉ？　違うって。こいつは俺の双子の妹！　全然似てないけどさ」
どうやら彼らはカップルではなく、双子の兄妹だったようだ。

「えええええええええええっ！？　ふ、双子だったの！？」
その言葉にやや大袈裟に驚いてみせるみさき。青年は、そんな彼女の様子にも動じる事なく続けた。
「ったく、世の中どうかしてるぜ！　何だってコイツがここに合格出来たんだ！？　こんなどーしよーもない大たわけが……」
言いながら、傍らの双子の妹に視線を落とす彼。妹は悪戯がバレた子どものように舌を出した。
そうしているうちに、文学部の退場が始まろうとしていた。彼女らもまた、その人ごみの中へと消えていく。

入学式の後は、全学部でそれぞれのオリエンテーリングが開かれる。
やはりここでも周一たちは学部が異なる為に、同じ部屋で顔を合わせる事はなかった。
しかしみさきだけは、先程知り合った双子の兄妹と早速親しくなっていた。元来社交的なみさきは、こういう所での溶け込みが非常に早いのだ。
オリエンテーリング終了後、みさきは周一と芽衣にメールを送っていた。文面はこうだった。

件名：面白双子発見！

本文：はいはーい、みさきちゃんのお通りよーん。
オリエンテーリング終わったんでしょー？　ならアタシのいる２３０１教室まであと１分以内に来る事！　遅刻したら七代先まで祟るわよ？
ぶっちゃけると、是非とも会って欲しい人たちがいるのよー。アタシの友達だー言えばへーきだから、仲良くしてあげる事！　わかったわね！？

２人に共通する文面はこうだったが、追伸として周一には（双子の妹ちゃんは尋常じゃない可愛さよ！）とあり、芽衣には（双子のお兄ちゃんはなかなかの上玉よ！）とあった。
実は、みさきは意外にも世話好き（おせっかいとも言う）な面も持ち合わせていたので、こういった気配りも忘れなかったのだ。
その時、勢いよくドアが開いたと同時に、息を切らせた芽衣が現れた。
「はぁ……はぁ……。も～みさきちゃ～ん！　１分は短いよー！　ボク疲れちゃったー！　この服走りにくいしぃ……」
肩で息をしながらみさきに愚痴をこぼす芽衣。着慣れていない礼服だったせいか、走りづらかったようだ。
「あらら、本気にしちゃったの芽衣ちゃん？　冗談っつーか誇大広告気味だったんだけど」
「そんなぁ～！　酷いよー！　え、じゃあじゃあ、カッコイイ双子のお兄さんがいるってのも冗談なのぉ？」
「あー、それはマジよ。ほら、あれ」
そう言ってみさきは、帰り支度を進めていた彼に視線を向ける。
突然話題の中心が自分に向けられた事で、彼はやや驚いていたようにも見えた。
（う～ん……。悪くないけど、ボクのタイプとはちょっと違うよぉ）
（そうだっけ？　芽衣ちゃん意外と面食いなんじゃん？）
（みさきちゃんが選り好みしなさすぎなんじゃないの？）
「ちょ……お前ら？　人の前でヒソヒソ話するってどうなんだよ？」
２人は、彼に聞こえないように配慮して小声で話していたはずだった。
どうやら彼の聴力は常人のそれを超越していたようで、断片的ではあるが二人の会話が耳に入ってきたらしい。
「あちゃー、聞こえちゃったみたいじゃん？」

「そだね……。あ……あの……、ゴメンね？」
芽衣はやや萎縮しながら、その青年に向けて謝罪した。
しかし彼は苦笑しながら返す。
「いーっていーって。気にすんなよ」
その様子から、どうやら彼も全く気にしていないようだ。

それから１０分後、ようやく周一も合流した。普段に輪をかけて面倒くさそうに。
「ったく、何の用だ？　俺はさっさと帰って休みたいんだけど」
みさきの顔を見るやいなや、恨めしそうに呟く周一。
「だーかーらー！　会って欲しい人たちがいるってメールしたじゃーん！　見てないの？　あ、見てなかったらそのまま帰ってるわよね」
「あー……そう言やそんなこと書いてあったな。で？　会って欲しい奴らって、こいつら？」
「ちょ、ちょっと！　初対面でいきなりこいつらはないでしょシュウくん！」
周一の言葉に驚き、慌てて制する芽衣。しかし彼には全く悪びれる様子が感じられない。
「あーゴメンねー！　こいつこんな性格だけど、悪気は全然ないのよー。わかってくれない？」
みさきもフォローを入れる。双子の兄妹はこれで納得したのか、互いに顔を見合わせながらこう言った。
「いきなり随分だな……。ま、悪気がねぇってんならいいよな？」
「うん。何か面白そうな人だよね？」
２人の言葉に安心したみさきは、周一の方に向き直りこう言った。
「あーよかったー。ほらシュウ！　アンタは謝る！」
「断る。別にいいだろ？　んなことしなくたって。悪気がねーならいいって言ってるし、俺には悪気なんてこれっぽっちもない。なら謝る理由はどこにもない。そうだろ？　違うか？」

「……はーいはい。もういいわよ。……でも、アンタってホント頑固よねー。羨ましいわよマジで」
いつもの事ながら、周一の性格にはさすがのみさきも手を焼いているようだ。
（シュウくん……。どうして……？　どうして変わってくれないの……？）
そんな周一の姿を見ながら、人知れず呟く芽衣の姿がそこにあった。

一週間後、ようやく大学でも本格的な授業が始まっていた。
周一、みさき、芽衣と例の双子を含めた5人は学部がそれぞれ異なるため、同じ講義室で顔を合わせる事はあまりなかったが、講義の時間以外では出来るだけ合流するようになっていた。
彼ら5人はこの日も、学食で合流する事にしていたのだ。
「はぁ……かったりぃなぁ全く……。何だって1時限が90分もありやがんだよ、高校の倍じゃねぇか」
「同感。すっげぇ眠いんだけど、寝たら単位やらんぞ！　とかぶっこく教授もいるしなぁ……。うっがぁぁ！　生理現象は止めらんねぇんだよー！」
「はぁぁ……」
周一と双子の兄、水嶋灯夜は互いに顔を見合わせながら溜息をつく。
「私は灯夜兄が寝ちゃわないように見ててあげられるけど……シュウくんは大丈夫〜？」
そう呟いたのは、双子の妹の水嶋音遠であった。
彼女は講義中、兄である灯夜が寝てしまわぬよう、講義そっちのけで見守っているようだ。
「あー、こいつの事ならなーんにも心配いらないよ？　ねーシュウ？」

皮肉を交えながら周一に話しかけるみさき。
「まぁ……な。たとえ寝てたとしても別にどーって事ないわけで……何とかなるのさ」
その皮肉に気付いていたかどうかは分からないが、周一は自信ありげにそう答えた。
「いや、その根拠のなさげな自信は一体何処から出てくんだ？」
訝しげに周一に尋ねる灯夜。しかし彼は、自分の食事を取りに行ってしまったためにその声が届く事はなかった。
その時声を発したのは、芽衣であった。
「本当は『出来ない事』なんてないんだよね……。あったとしても、それは自分がやらないだけで……。」
「え、えっと……芽衣ちゃん？　どったの？」
「今は出来ないとか、今までのやり方じゃ出来ないとか、一人じゃ出来ないとかってのは、言い訳でしかないんだ……」
一言一言を、噛みしめるように言う芽衣。
そこにいる誰もが不思議そうに見つめる中、彼女はさらに続けた。
「シュウくんは……変われるはずなんだよ……。でもやろうとしないから、変われないんだよ……」
芽衣は、姿が見えなくなってしまった周一がいるであろう方向に目をやる。
「今のままのシュウくんも、あれはあれで個性かも知れないけど、みんな心配してるんだよ。あのままで社会に出たら、きっとつまづいちゃうよって……」
「おい……芽衣ちゃん？　いきなりどうした？」
状況を飲み込めない灯夜は、彼女に顔を近づけて心配する。
芽衣の表情は、真剣そのものであった。彼女は、誰よりも周一の逸脱した性格を心配していたのだ。
周一が席を立った今、仲間たちに自分の気持ちを悟って欲しかったのだろう。

「芽衣ちゃん？　まさか、本気であんなヤツの心配してたの？　そりゃアタシだってちょっとは……ねぇ。でもさすがにそこまでは……」
みさきがそう言うと、芽衣はうつむいてしまった。
「……そうだよね。ボク、考えすぎだよね……。でも、本当のシュウくんはあんなじゃないよ……。ボクがからまれてた時、真っ先に助けてくれたのシュウくんなんだもん……」
「え～？　からまれたって何ぃ？」
素っ頓狂な声をあげ、不思議そうに尋ねる音遠。
それもそのはず、灯夜や音遠にとってこの話は初耳であるからだ。
芽衣は彼らに、周一、和也、圭輔との出会いを語った。
大学通学の下見の為に西牧田駅周辺を散策していた途中、不良２人にからまれた芽衣であったが、周一を筆頭とする３人に助けられたとのことだ。

「おいお前ら。女の子１人に野郎２人が相手してんのかよ」
「何だいアンタら？　オレらはこの娘に用があるんよ。あっち行って」
「ちょっとねぇ……見苦しいかなキミ達。女の子ってのはもっと丁重におもてなしするものだよ？」
「いや、それは今使っていい言葉じゃないと思う」
「ぬぅ。空気読めてないのはオレだけってか。で、どうすんだよ？」
「そうだな……この中で一番足が速いのはシュウだから、おれと圭輔であいつらの相手をしよう。その間にお前はあの娘を安全なところへ連れてくってのはどうだ？」
「オッケー。いいじゃんいいじゃんその作戦」
「任せときな。現役を退いたとはいえ、俺に追いつける奴なんかいるわけないんだからな」
「どうしたぁ？　逃げないのかぁ？　逃げないならちょーっとヒド

イ目に遭ってもらっちゃおうかなぁ？」
「誰が逃げるか！　お前らと遊んでやるよ。かかってきな！」
「ひゅーっ、シュウくんかーっこいい！」
「実際相手するのはおれたちなんだけどな。ははは」
「ちぇーっ、オレらも随分ナメられちまったもんだぜ。よっしゃ行くぜぇ！」
「お前の相手はおれだ！」
「シュウ、今だ！　早くその娘を安全なところへ！」
「分かってるよ！　ほら、こっちだ！」
「あっ！　あの野郎逃げやがった！」
「よし、シュウの奴上手くやったな。和也！　オレらも行くぜ！」
「わかった！　というわけだ、逃げさせてもらうぞ！」
「うっわ、逃げられた！　ちっくしょ～！　灯輝がいればあんな奴ら何でもなかったのに！」
「なぁ……オレらもそろそろ、不良やめっか……？　オレらだけじゃ話になんねぇし……」

「……まさかその不良って……。……いや、いいや。何でもない」
灯夜には、芽衣にからんだ不良に心当たりがあったようだが、多くは語らなかった。
「今のシュウくんだったら考えられないでしょ？　『俺には関係ない』って言いながら、和也くんや圭輔くん任せにしてたと思うの。だから、今の彼とは違う……」
「確かに。アイツが誰かの為に動いたって聞いた時ゃ、アタシ自分の耳を疑ったもんさね」
「でも同じシュウくんなんだよ……ボクは、あの時のシュウくんのがいいんだよぉ……。戻ってきて欲しいんだよぉ……。ぅぐっ……」
言い終わる前に、小さく嗚咽を漏らす芽衣。その真剣さに、みな一様に暗い表情になってしまった。

その時、自分の食事を運んできた周一が戻ってきた。彼は、自分のテーブルの仲間が全員暗い表情であった事に違和感を覚えるのだった。
「なんだなんだ？　一体どうしたってんだよ？　よぉ、何かあったのか？」
この原因が自分にあることに全く気付いていない周一は、自分の席に着きながらそう尋ねた。しかしそれに応答する者は誰一人としていなかった。
「なんなんだよ……。まぁ、別にいいか。教えてくれないって事は、俺には関係ないんだろうし」
周一はやはり自分のペースを崩さず、さらっとそう言ってのける。
「おーい、お前ら食わないのか？　俺、先食っちゃうぞ？」
場の空気を読もうともせず、全員に尋ねる周一。
その声を皮切りに、無言のまま全員立ち上がった。そして、さっさと自分の食事を取りに行ってしまう。
「だからなんなんだっての……まぁ、いっか。俺には関係ないっと。でも……せめて食わないで待っててやるか」
席を立った芽衣は、ちらっと周一の方へ目線を向けた。
（絶対に……あなたを変えてみせるから……）

その週の土曜日は、運良く全員のスケジュールが空いた。
その日を利用した周一たちは、大学の違う和也たちと久しぶりに会う事になった。当然、言い出したのはみさきであるが。
久しぶりとはいえ、会わなかった期間はほんの1週間でしかない。しかし、彼らにとってみれば1週間はかなり長い期間であった。
それだけ、彼らの関係は密なものであるのだ。
「久しぶりだなーシュウ！　元気してたかぁ？」
まずは圭輔が、喜びを露わにしながら周一の元へと駆け寄る。
「っとと……。ったく圭輔、お前は相変わらずだな。」
飛びついてきた圭輔を軽くあしらいながら周一が言った。

そのさなか、見慣れない顔を見つけた和也がみさきに尋ねる。
「なぁみさき？　あの２人はどちらさん？　おれは多分会ったことないけど……」
「わたしも……。あの人たち誰なの？」
「あのコたち？　アタシのお友達よー。大学のね。すっごく仲よさそうだけど、アレ双子ちゃんなのよー。彼氏彼女ってわけじゃーないのよ？」
「へぇ～、双子かぁ。傍目からじゃカップルにしか見えねーな」
「でしょ？　でもねぇ、２人ともいい人だよ。お兄ちゃんはちょっと抜けてるとこあるけど気さくでいい人だし、妹ちゃんはもう、すっごくカワイイの！　ボク、あこがれちゃうなぁ……」
「芽衣ちゃん！　それマジ？　よーっしゃ、んじゃーちっと売名行為でもしてくっかね」
足取り軽く、圭輔は双子の方（どちらかと言えば音遠寄り）へと行ってしまった。
「……はぁ。ホントあいつって相変わらず軽いよなぁ。まぁでも、おれらも行こうか、都萌？」
「うん。……大丈夫だよね？」
「大丈夫だよ。ほらっ」
和也は、都萌の背中を押すように圭輔の後に続いた。
人見知りの激しい彼女は、自分の通う大学でもなかなか周囲に馴染めずにいるようだ。
一方圭輔は、すでに双子に自己紹介を始めていた。
「はじめましてかわいこちゃん。僕の名前は秋野圭輔。下の名前で呼んじゃって下さい。今日のこの出会いを価値のあるものにする為に、これから２人で何処かに出かけませんか？」
かなり芝居じみた口調で自己アピールをする圭輔。勿論この言葉は２人に向けられているのではなく、音遠のみに向けられていた。
その様子を見た和也は、気付かれぬように後ろから圭輔をひっぱたいた。

「いってぇ！」
「ドーアーホ。こぉのナンパ野郎が。おれまでそんな風に見られたらどう責任取ってくれんだ」
「いってぇ～な和也！　おめ力強いんだから、もちっと加減しろっ！　脳がビックリしたらどうしてくれんだ！」
「あ……あのさ……そこの3人さん……？　なんか俺とかって出番食われてる気がするんですけど？」
ひとり取り残された感じを受けた灯夜が、情けない声で尋ねる。
その声に反応したのは、圭輔でもなければ和也でもなく、妹の音遠であった。
「灯夜兄は～、私の大切なお兄ちゃんだぅ♪　きゃう♪」
そう言いながら灯夜にひっつく音遠。その様子をはっきりと目撃した圭輔は、これ以上無いほどに落胆してしまった。
「う……嘘だぁ！　オレよりお兄ちゃんの方がいいのかぁ……？」
「どうやらそうみたいね。圭輔くん、諦めな？　女の子はいっぱいいるんだよ？　でもぉ、わたしにはぁ～……和也くんがいるんだぁ。きゃはっ☆」
そう囁きながら、視線を和也の方へと向ける都萌。
「ぐっはぁぁあ！　痛ぇっ！　それ、いろんな意味で痛ぇよともちゃん！」
都萌の発言と行動（当然、本人に悪気は全く無い）にさらに悶え苦しむ圭輔であった。

その場に居合わせた8人（約一名気絶中ではあるが）は、改めて互いに自己紹介を交わし、携帯のアドレス交換を行ったりもしていた。
「おーい圭輔ー？　聞こえるかー？」
「ほへぁ～……？」
さすがに彼の身を案じたのか、和也が圭輔を現実世界に戻した。
その言葉で、ようやく普段の調子を取り戻した彼がこう提案する

のだった。
「よーし！　みんな注目っ！　突然だが明日、このメンバーでもう一回集まろうじゃないか！　で、どっか行こうじゃないか！」
突然の提案に、みな一様に驚きの表情を見せた。
「おいおいマジでいきなりだなぁ。ま、俺は暇だから出てやってもいいけど」
「灯夜兄が行くんなら私も行くなの！」
「あ、じゃーアタシも行くわ」
「えっと、わたしも行ってもいいかなぁ？」
「……じゃ、おれも出る事になるんだな」
「ボクも行く！　シュウくんも行こっ？」
「そうだな……。この空気で行かないとは言えないし、別にいいぞ。暇だし、金も無いわけじゃないしな」
だが意外にも、全員が参加の意思表示をした。
それと同時に、都萌からこんな提案があった。
「あっ、そうだ。あのさ、優香ちゃんも呼んでいいかなぁ？　明日ならテニススクールのコーチも無いみたいだし」
彼女が話題に挙げた人物……南野優香は、和也と都萌の中学時代の友人だ。
彼女はまだ大学生ながら、テニススクールのコーチをこなせるほどの腕前を持っている。
しかしながら、中学時代は一度も都萌に勝てなかったようだ。
中学時代でも引っ込み思案で人見知りの激しかった都萌にとって、彼女の存在はとても大きなものだったようで、半ば尊敬の念を抱いてもいる。
異国の血が混ざっているようにも見える彼女の容姿は、何処か神秘的な雰囲気も併せ持っていた。
ところがそのわりに性格が整っておらず、他人に必要以上に厳しく当たったり、守銭奴な面を多々見せたりもする。
彼女がテニススクールのコーチをしているのも、自分が好きでや

っている点と単純に時給が高いからという理由があるのだ。
さらに趣味に格闘技観戦があり、自分でも実際に空手をしている。
肝心の腕前だが、かなりの高レベルまで達しているようで、蹴りで木製バットを折ったとも自負している。
どうやら、次はコンクリートを蹴りで割る事が目標らしい。
そんな彼女を、圭輔はやや苦手としていた。
彼女は軟派な男を生理的に受け付けないらしいので、折り合いをよくする為か、圭輔は彼女の前だと女の子に軽々しく声をかけることはしていない。
勿論それは、必死に抑制しないと自然に出てしまうものなのだが。
「あ、全然オッケーだよ。人数は多い方が楽しいしね。はは……」
「ホントー？　ありがとっ！　優香ちゃんも喜ぶよ！　連絡しとくね」
大喜びの都萌をよそに、複雑な表情を見せる圭輔。
口では承諾するものの、どこか不自然な点があるのは否めない。
（大丈夫か？　無理してんじゃないのか？）
と、和也が全員に分からないように圭輔の耳元で囁く。
（ぶっちゃけるとそうだけど……そんな事言えっかよ。オレ自身、そういった娘にも慣れておくべきだと思うし）
（そっか。ま、あいつもそんな嫌な奴じゃないし、頑張れよ）
「おーいそこのお前ら。なーにヒソヒソやってんだ？」
そんな様子の2人を見て灯夜が尋ねる。やはりここでも彼の常人離れした聴力が発揮されたようだ。
「何で聞こえるんだよ？　ぜってぇ聞こえない声で話してたハズなのに……」
「知るか。ま、断片的にしか聞こえてねぇけどさ」
「凄いな……」
「何か事情があるみてぇだけど、頑張れや。な？」
そう言いながら灯夜は圭輔の背中を叩く。彼なりの激励のつもりなのだろう。

「ありがとな。……お前、いい奴だな。さすが兄ちゃんだ」
「……何だよその『兄ちゃん』って。そんなに兄貴なイメージ強いの俺って？　初対面のはずのお前らにもわかるくらい？」
「そりゃ、あんなの見せられちゃーなぁ……」
「さっきのアレだな。まさか、毎日あんな調子か？」
「あぁ、そのまさかさ……。お前もわかるべ？　ま、お前の場合は俺よっかもーちょいマシそうだけどな」
「ん……まぁ。分からんでもない」
　和也と灯夜が互いに顔を見合わせながら頷くと、圭輔は足元の小石を蹴りながらこう漏らした。
「ケーッ！　大層ぜーたくな悩みですなぁ！　はぁ、なーんでオレだけモテないんだろーなぁ……」
「あれ？　シュウは？　あいつにもいないだろ？」
「何だよ和也、気付いてないのか？　ホント鈍いなお前は。実はな……んが」
　圭輔がそこまで言った次の瞬間、何者かによって次の言葉が遮られた。
「あーっ！　あーっ！！　ダメダメ！　言っちゃダメ！　言わないで！」
　圭輔の言葉を遮ったのは芽衣であった。
　実は、この行動が圭輔の次の言葉の内容を明かす事になっているのだが、どうやら彼女は気付いていないようだ。
「ほほう、そういう事か。ってか芽衣ちゃん、何処から聞いてた？」
　納得しながら芽衣に尋ねる灯夜。どうやら彼は気付いてしまったようだ。
「えっと、和也くんが『分からんでもない』って言ってた所からかな？　てゆーか、『そういう事か』ってどういう事よぉ、お兄ちゃ～ん……」
「またお兄ちゃんか……。俺には水嶋灯夜というちゃんとした名前がだな……」

「え？　え？　どういう事だ？　分からん……」
灯夜が理解した内容をいまいち飲み込めない様子の和也。そんな彼に芽衣は、やや興奮しながら言った。
「分からなきゃ分からないでいーの！　もー全くぅ。酷いよぉ圭輔くん！」
「何なに？　そこで盛り上がっちゃってどしたの？　アタシらも混ぜてー」
「えぇ～っ！？　もーイヤぁ～！　……むにぃ」
みさきにまで追求されてしまった芽衣は大きく脱力し、ぺたりと座り込んだ。
それから程なくして、彼女を中心とする笑いが起こった。
だが、その輪の中に周一の姿はなく、彼はただ一人、虚空を見つめていた。
何かがあるわけでもなく、ただ遠くを見つめている。
まるで、新たな行き場を求める渡り鳥のように。
（シュウくん……何処を見ているの……？　その目にボクは映ってるの……？）

翌日、優香を交えた９人は、商店街の一角にひっそりとたたずむ喫茶店『Ｈｅｘａｇｒａｍ』の前にいた。
ここは、一人暮らし中の芽衣が見つけた雰囲気のよい店で、彼女はすっかりここの常連となっていた。
「マスター！　こんにちわー！」
カウンターの向こうにいるであろう、この店の主人に向けて声をかける芽衣。
しかし、返事は彼らの背後から聞こえてきた。
「呼びましたかな……っと」
その声の主は、やはりこの店の主人であった。身長は圭輔と同じかそれ以上の長身で、年は２０代後半と推測される。
「ふむ。今日は随分とまぁ、大勢で来たんだな。見た事ある顔から

そうでない顔までさまざまだ」
「そうなんだよー。みんなで集まろうって事になったの」
「なるほど。そういう事なら構わないけど、他のお客さんも来るから、あんまり騒ぐなよ？」
「わかってるって！」
「いい返事だ。んじゃあえっと……9名様ご案内ね。……あ、そうだ。一応聞いとくけど、禁煙席でいいかな？　男性諸君」
突然自分たちに話が振られた男性陣であったが、すぐに圭輔がこう返す。
「あったりまえじゃないッスかぁ！　オレらの誰に煙草なんか吸いそうな奴がいるってんですかぁ？」
「キミだぁぁぁぁ！！」
「オレかぁぁぁぁ！！」
「おぉ？　キミはなかなか見込みがあるな！　僕にはわかるよ、うん」
マスターと呼ばれた長身の男性は、どうやら圭輔を気に入ったようだ。
「ま、確かにおれらは煙草なんか吸いませんから。禁煙席でお願いします」
「しっかしよぉ、初対面な奴もいるってのに随分馴れ馴れしいなぁ。俺らん時ゃあんなのなかったぜ。ま、それも芽衣ちゃんの人徳かな？」
「どうなんだか……。俺にはどうでもいい事だけどな」
そんな事を言っているうちに、9人は店の奥のテーブルへと案内されていた。
しかし、この店には9人がけの席はないので、近くのテーブルを寄せ集める形となったのだが。
「そんじゃま、ごゆっくり。あ、水はそこから適当に持ってって」
そう言いながらマスターはカウンターへと引き返す。
どこか飄々としていて、つかみどころのない人間のようだ。

「……。私が皆さんに自己紹介をすればよろしいのですか？」
やや緊張した面持ちの優香は、たまらず隣の都萌に聞いていた。
「うん。優香ちゃんと初めて会う人もいるからね」
「わかりましたわ。えー……私は、南野優香と申します。大学に行きながら、地元のテニススクールのコーチをしています。……あ、あとは何がよろしいかしら？」
「う～ん……。それじゃ、好きな事とかは？」
言葉に詰まったのか、再び都萌に聞く優香であった。
「好きな事……ですか。一つ挙げるとするならば、格闘技でしょうか。観戦するのも、実際に行うのも。たしなむ程度ですが、空手をやっています」
「うわぁ～、凄いんだねぇ～！」
空手をやっている。この事実が音遠の興味を引いたようだ。
「ありがとう……ございます。……あなたのお名前は？」
「私？　私は水嶋音遠だよ！　で、この人が水嶋灯夜！　私のお兄ちゃんなの♪」
「えっ？　お待ちになって……。あなた達、よもや中学校は、第三倉野中学校ではありませんこと？」
思い出したかのように、音遠に尋ねる優香。どうやら、共通項を見つけたようだ。
「うん、そうだけどぉ？」
「やはりそうでしたか。私の中学校もそこでしたのよ。水嶋さん……と仰いましたっけ？　あなた、私と同じ組でした事、覚えてないかしら？」
と、灯夜に尋ねる優香。
「南野……南野……。あぁ、はいはい。そういやそんな名前の女子いたっけか……」
しかし、灯夜の記憶は優香ほど鮮明ではなかった。
「はっきりしませんわね……。まぁ、よいでしょう。あまり目立つ

生徒ではありませんでしたし。お2人とも、改めて宜しくお願いします」
「お、おう。悪いなぁ、記憶が曖昧で……」
「こっちこそよろしくね、優香ちゃん♪」
「あらあら、もうちゃん付けで呼ばれてしまいましたか。でしたら、私もちゃん付けで呼んだ方がよろしいかしら」
　そのように音遠に尋ねる優香。音遠は目を輝かせながら、その申し出を承諾した。
「うん！　いいよー！」
「では……音遠ちゃん。そして、灯夜ちゃん？」
　ゴツンッ！
　突然の事に驚き、灯夜はテーブルに頭をぶつけた。
「って、俺もかよっ！　おーいたたた……」
「冗談ですわ。水嶋さん」
「どっちだよっ！」
　頭をさすりながらそう返す灯夜。かなり強く打ってしまったようで、額が赤くなってしまっている。
「でもでもぉ、ちゃん付けってかわいいね！　じゃーさーじゃーさー、今から灯夜兄の事『お兄ちゃん』って呼んでもいい？」
「あら、それは名案ですわね。よいのではなくって？」
「ちょー待て！　勝手に決めるな！　そう呼ばれる俺の意見も聞けー！！」
「お黙りなさい。あなたに発言権はありませんわ」
　優香は灯夜の目を見据え、よく通る声できっぱりと言う。
「そう言って、突っぱねるつもりでしょう？　これだけ期待している妹さんに『やだ』などと言って御覧なさい。あなたの『兄』としての人格が疑われますことよ」
「兄としての……人格、だと？」
「それだけではございません。今まで築き上げてきた信頼関係も、砂上の楼閣の如く崩れ去ってしまうことでしょう……」

そこまでは憂いを含んだ表情で続けていたが、突如としてその顔を変え、ピンと伸ばした人差し指で灯夜を指差した。
「それでもよいと仰るのならば、私はこう言いましょう。……あなたは水嶋音遠の兄として失格ですわ！」
その瞬間、全員に稲妻のような衝撃が走った。
「うーわぁ、俺自身が否定されちまったよ……。ったく、じゃーいいよ。何とでも勝手に呼びやがれってんだ！　ちくしょーめ……」
灯夜はついに観念し、音遠に自分の事を『お兄ちゃん』と呼ぶ許可を出したのだった。
「ホントにー！　ありがとー！　大好きだぅーお兄ちゃーん♪　きゃうぅー♪」
「ぐっぼはぅあ……。はぁ、俺って一体……」
そんなさなか、和也が不意に優香に声をかける。
「なぁ南野？　お前って、そんなキャラだったっけ？　中学時代は堅物だったお前が、そんな冗談をスッと言えるようになってるなんてなぁ……」
「いけません？　時は常に変化しているものですのよ？　少々の変化など見逃せる寛容さが、現代社会において重要ではないこと？」
「……悪い。お前はやっぱあのまんまだ」
（少しの変化を、見逃せる寛容さ……？）
今の優香の言葉を刻み込み、小声で呟く芽衣。
（シュウくんの変化は……『少しの変化』なのかなぁ……？　違うよね……）
ひとり天井を見上げながら、思索に耽る芽衣。しかし……。
「ちょい、ちょい！　芽衣ちゃーん？　どーしちゃったのー？　おーい？」
そんな芽衣の様子を見たみさきが、不意に声をかけてきた。
「えっ！？　あ、みさきちゃんかぁ……」
「みさきちゃんかぁ、じゃないわよー！　ちょっとー、どうしたの？　眠いの？　ダメよー、ちゃんとねんねしないとー」

「あ、いや、そうじゃないんだけど……ちょっと考え事してたの」
「ふ～ん……結構ね。アタシでよければ相談に乗るわよ？　あ、恋の話とかは勘弁ね。アタシもそっちはうとといしー」
「うん、ありがとね。気ぃ使ってもらっちゃって。あと、ゴメンねー？　心配かけちゃって」
「いいのよーそんな事！　お友達、でしょ？」
「うん……」
（お友達、かぁ……。シュウくんはボクの事、ただの『お友達』としか思ってないのかなぁ……。ボクは……）

第2章：Pure Soul

「はぁ～あ……」
家に戻るなり溜息をつく芽衣。
彼女は大学のある牧田に一人で暮らしている為、家に帰っても誰も居なかった。
そして、最近の彼女は溜息が多い。
「溜息一回ごとに、幸せがひとつずつ逃げていくって言うけど……はぁ～あ……」
外から帰ったそのままの格好で、ベッドに横たわってしまった。
4月の入学式からすでに2ヶ月が経過し、6月も半ばに差し掛かろうとしている。
同学部の友人も増え、周一たちとは学部を超えた付き合いをしている。
傍目から見れば、これ以上無いと言ってもいい程に充実した生活を送っているはずなのだが……。
「あ……もうすぐボクの誕生日じゃん……。ヤダなぁ、このまま年取っていくの……」
ベッドに横たわったまま、壁に掛けられたカレンダーを見上げて呟いた。
「はぁ～あ……」
そして溜息を、また一つ。
この理由は自分自身にではなく、周一にあった。
芽衣を始めとする仲間は彼の逸脱した性格を懸念し、総出で周一の性格を改善する為に努めている。
だが、その働きかけも空しく、彼は全く変化を見せない。
その理由のほかには……自分でも気付いているのだが、芽衣は周一が気になっている。
友人としてではなく、ひとりの男性として。

よって、彼の性格を変えようとする使命感は他の誰よりも強かったのだ。
何とかして周一の性格を変える。そして、自分の正直な気持ちを彼にぶつける。それが現在の彼女の心境であった。
しかしながら、状況は一向に変わらないままだ。
（シュウくん……早く帰ってきて……）
心の中でそう呟きながら、彼女は静かに目を閉じた。

翌日もまた、キャンパス内の掲示板に学生達が集う。
大学からの連絡は全てこの掲示板に掲示される。
高校時代までとは違い、逐一担任教師が連絡する事はまずない。
むしろ、『担任』という概念もないに等しかったりする。
そのため学生は、この掲示板からの情報を頼りにその日の行動を自分で決定せねばならない。
芽衣もまた、この日の連絡事項を知る為に自分の学部である教養学部の掲示板へとやってきた。それを見たところ……。
「あっれー？　今日休講になってるし」
どうやら、この日の講義は教員の都合により休講になっていたようだ。
掲示された紙には『研修旅行の為、暫くこの講義は休講』と書かれていた。
「なーんだ……じゃあ今日はなんにもないんじゃん」
芽衣は、この曜日に関してはこの講義しか履修していなかったため、休講となると来た意味がなくなってしまう。
勿論、それは芽衣だけの事であって、周一やみさきたちもそっくり同じになっているわけではない。
「休みじゃしょーがないか。帰ろっと。……でもヒマだなぁ。家帰っても誰もいないし、カフェにでも行こうかな……？」
暇をもてあました彼女の足は、自然とＨｅｘａｇｒａｍに向かっていた。

まるで、何かに吸い寄せられるかのように。

「いらっしゃ……ん？　芽衣ちゃんか。どうした？　今日は大学休み？」

「まぁ、そんな感じ。あ、アイスコーヒーお願いね」

そう言いながらカウンター席に座る芽衣。

マスターは慣れた手つきでコーヒーを淹れている。

そんなマスターに、芽衣はいくつかの質問を投げかける。

「あのさぁマスター？　一人で大丈夫？　他に店員さんいないんでしょ？」

芽衣に尋ねられたマスターは、グラスを片手にこう返事する。

「ダメだったらとっくに潰れてるっしょ。ほい、お待ちどうさま」

そう言いながら、芽衣にアイスコーヒーの入ったグラスを手渡した。

「ありがと。でもさぁ、やっぱ大変じゃない？」

「いんや別に。というか僕のことなんかより……芽衣ちゃん、何か悩みあるでしょ」

「えっ！？　ヤダなぁ。ないよぉ……悩みなんて」

「嘘ついたってわかるよ。顔に書いてあるから」

「ちぇっ、マスターには敵わないや……」

「僕でよければ相談に乗ろう。これでもキミらより長く生きてるつもりだし。何たって三十路目前だからねぇ……」

「うん……。あのね……？」

そこで芽衣は、今自分が抱えている事を全てマスターに打ち明けた。

周一の性格、その性格を変える為の行動、そして、自分が抱く周一への感情を。

「そうか……青春してるんだねぇ。いいなぁ、若いって」

「も～マスター！　ちゃんと聞いてよぉ！　正直に言うの、すっごく恥ずかしかったんだからぁ……」

「あーゴメンゴメン。……で？　芽衣ちゃんはどうしたいの？」
「ボク？　だから……シュウくんの性格を変えたいなぁって」
「それは聞いた。だから、その上で具体的にどうしたいのかって聞いてるの」
「具体的にって……わかんないよ。ボク達が何したって変わってくんないし……」
「ふむ……？　わからないからと、簡単に諦められるのか。芽衣ちゃんの悩みとは、その程度なのかな？」
「違うよ！　違うけど……ボク、何していいかわかんなくなっちゃったんだよ……」
「わかんない。だから出来ない。だから終わりにする。最近の若い奴ってみんなそうだね。やろうともせず、逃げているだけだ」
「……」
そこで言葉が詰まる芽衣。だが、マスターはさらに続ける。
「出来ない事など、ない。自分がやろうとしていないだけだ。今は出来ない、今までのやり方じゃ出来ないだの、そんなのはただの言い訳だ」
そこまで言って、先ほど自分用に淹れていたアイスコーヒーを飲み干したマスターであった。
「ならば日を改める、新たなやり方を見つけるだの、いくらでも方法は思いつく。本当に芽衣ちゃんが彼の事を変えたいと思うなら出来るはずなのだがな」
（これ……前にボクが言った事と似てる……）
芽衣はふとそう思ったが、声に出す事は出来なかった。
「変わらないまま、変わろうとしない彼もどうかと思うけど、わからないからと変えるのをやめちゃった芽衣ちゃんも同レベルだよ」
「うぅ……」
「あとは……そうだなぁ、芽衣ちゃんだけじゃないでしょ？　周一くんの性格変えたいって思ってるのは」
「うん……」

「それなら、みんなと協力しなよ。一人でやれなんて言ってるわけじゃないんだし、な。……おおっと、ここまでにしておこうか」
そこで言葉を切ったマスター。これ以上は意味がないと思ったのだろうか。
芽衣はうつむいたままであった。……その目には、涙が浮かんでいる。
マスターの言葉で気付かされた、自分の弱さ。それを責めているのだろうか。
「ふむ、少し言葉がキツかったかな？　でも、こういう事ははっきり言っちゃった方がいいからね。僕の言いたい事を取り違えられても困るし」
「マスタ～……。ボク……ボク……えぐぅ……」
ついに耐え切れず、感情を露わにした芽衣。大粒の涙がとめどなく流れ出す。
マスターはそっとハンカチを手渡した。
「……ちょっと言い過ぎたようだな。悪かった。もう泣かないで……。本当にごめん」
「謝らないでよ……。ありがとうマスター……。ボク、逃げてたね。シュウくんを変えようと思ってるのも、実際に変えるのもボク達なんだよね……」
流れる涙を止める事もせず、芽衣が言葉をつむぎ続ける。
「ボクがこんなだったから……変えられないからって逃げてたから……シュウくんは変わらなかったんだ……」
「ん……まぁ、そんなとこ。でも、いくら芽衣ちゃん達が頑張っても、周一くんが変わろうとしない事には仕方ないからね。こればっかりは彼の問題だ」
「そこは……ボク達が何とかする。少しでも変わろうと思ってもらえるように、努力する」
「頑張ってくれ。僕は応援してるよ！　……あ、何か食べてくかい？　今日はおごるよ、泣かせちゃったお詫びとしてね」

「えへへー。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらっちゃおうかなぁ？
『ジャンボトリュフパフェ』いい？」
「オッケー。ジャンボトリュフひとつ入りまーす！」
「入りまーす！　って、マスターしかいないでしょー？　誰に声かけてるの？」
「んー？　自分に」
「あっははは！　マスターおもしろ～い！」
「まずは、トリュフをさっと湯通ししてと……」
「あー、今日は白トリュフなんだねー？」
すっかり涙の乾いた芽衣は、普段の調子を取り戻していた。
（待っててねシュウくん……。ボクが必ず、あの時のシュウくんに戻してあげるから……）

翌日の昼下がり、周一たちはいつものように学食に集まっていた。
そこで起こる会話は、いつでも他愛のないものだ。
「ふへぁ～……眠い。もう俺ダメかも」
「アタシもよー。眠いわ、マジで」
「そうか？　俺は今日はそうでもなかったけど……」
「学部で違うんでしょ？　ボクもあんまり眠くないし」
「文学部はつらいのかなぁ……？　いいなぁ、シュウくんと芽衣ちゃんは」
「そう……なるのかな。ま、だとしたらラッキーなんだけど」
そのような会話の中、芽衣は音遠に囁きかけた。
（ねぇ、音遠ちゃん？　ちょっといい？）
（なぁに？　どうしたのぉ？）
（あのさ、お兄ちゃんのことなんだけど……。音遠ちゃんさ、お兄ちゃんにベッタリじゃん？　嫌がられない？）
（う～ん……。私は嫌がって欲しくないんだけどぉ、お兄ちゃんは嫌がるの……あうぅ）
「こらこら、そこの2人！　俺の話で盛り上がるのは勝手だが、ヒ

ソヒソ話は気になるからやめやがれ」
「お、お兄ちゃん……」
不意に声をかけられたことで、思わず同じタイミングで声を出してしまった芽衣と音遠。
「お兄ちゃん……か。その呼ばれ方にもいい加減慣れちまったなぁ……」
「もーお兄ちゃん！　ボク達は、女の子同士で話してたの！　男の子には関係ないんだから気にしないでよぉ！」
「はっ、はい」
語気を荒げた芽衣の迫力に押されたのか、素直に返事をする灯夜。
「ちぇっ、何だよ……。じゃあよぉシュウ、俺らも男同士の話でもするか？」
「え？　まー……話くらいなら聞いてやらん事もないが。あいつらは勝手にやらせときゃいい。俺には関係ないからな」
「嫌なら別にいいんだよ……。つーか、お前そればっかだな」
（そうなんだよ……。いっつも『俺には関係ない』って言ってばかり……）
（そうだよね……。どうしてシュウくんってああなんだろう……）
（ボクはシュウくんを変えてあげたいんだけど……一人じゃ無理そうなの。だからさぁ音遠ちゃん？　ボクに協力してくれないかなぁ？）
（いいよー？　私に出来る事ならやってあげるよ♪　でも、何すればいいの？）
（えっとねぇ……男の子との接し方教えて！　お兄ちゃんといつも一緒にいるならわかるでしょ？）
（えっ？　う～ん……。改めて聞かれると難しいなぁ。私は、とにかくお兄ちゃんと離れたくないって思ってるかな？）
（離れたくない……か）
（ほえ？　芽衣ちゃんもシュウくんと離れたくないの？）
（えっ？　えっ？　そ、そういうわけじゃないんだけど……）

（ちょい、ちょい！　アタシに内緒で何の話してんのー？）
必死に弁解する芽衣の隣からみさきが割り込んできた。
（芽衣ちゃーん、顔赤いよー！？　どしたのー？）
（え、いや、その、これは……そ、そうよ。今日は暑いじゃん？
ほら、もーすぐ梅雨だから……ね？）
（や、すっごく無理してんのがモロバレなんすけど）
（……むにぃ）
（いぢめちゃダメよーみさきちゃん。芽衣ちゃんはねぇ、シュウくんの性格を変えたげたいんだって！　だから私に手伝って欲しいんだって）
（なーんだそーだったの。最初っからそー言えばよかったじゃん。よっし！　アタシに任せときな！　圭輔たちにも協力してもらうから！）
（さっすがみさきちゃん！　頼りにしてるよー！　姐御☆）
（……なーんか引っかかるけど、まーいーわ。じゃー圭輔たちにはアタシから連絡しとくわ）
（うん、そうしてくれると有難いな）
「……あのな？　お前ら、食わないのか？　飯冷めるぞ？」
「あっ……」
女性陣の内緒話は、かれこれ１０分は続いていた。
その間は食事に全く手をつけていなかったので、食事が冷めてしまうのではないかと懸念した周一が声をかけた。
その裏では、さりげない灯夜の働きかけがあったようだが、この時点では誰一人として知る事が無かった。
「すっかり忘れてたわ。ありがとねーシュウ！　……でも、まさかアンタに心配されるとは思わなかったわね」
「へっ、うっせーよ！　（ったく兄貴の奴め……自分で言えばいいものを、何でわざわざ俺に言わせたんだ……？）」
（こういう面もあるのに……どうしていつも出さないんだろう……？）

４時限目終了後、芽衣は周一の携帯へ電話を入れた。
「ん？　芽衣か。どうした？」
「あ、シュウくん４限終わった？」
「終わったけど」
「５限って……ある？」
「ねぇよ」
「あー、そうなんだ。よかったぁ。ボクもないよー」
「……で？」
「あのさぁ……一緒にＨｅｘａｇｒａｍ行かない？　いいでしょ？」
「Ｈｅｘａｇｒａｍって、こないだみんなで行った喫茶店か？　いいけど、どういう風の吹き回しだ？」
「別にいいじゃーん！　女の子にそういう事聞いちゃダメだぞー？」
「……切るわ」
「あー待って待って！　待ち合わせしようよ。そうだなぁ～……外の掲示板で合流しよ？」
「もういいか？　んじゃまた後で」
周一はそう言うと、さっさと通話を切ってしまった。
途中から、明らかに面倒くさそうに応対をしていたのは言うまでもないだろう。

梅雨に差し掛かっているせいか、最近の空模様は優れない。
この日もやはりあまり良い天気とは言えず、今にも雨が振り出しそうな気配であった。
滞りなく周一と合流できた芽衣は、その天気の事を話題に出した。
「そうだな。俺も雨は好きじゃない。自転車が滑るからな。それでも乗ってくるけど」
意外にも、周一はこの話題に食いついてきた。
芽衣はこれ幸いと見るや、さらに話を展開していく。
「そうだったんだ……。シュウくんってさ、ホント自転車好きだよ

ねー」
「まぁ、便利だしな。車の免許なんか取ろうとも思わない。めんどくせーし、金ねーし」
「そう……。あ、着いたよ」
「お、本当だ」
牧浜大学からカフェまでの距離は１ｋｍも無い。よって、会話しながら歩いていればすぐに着いてしまうのだ。
この時は周一も自転車を押して歩いていた。

「いらっしゃい。お？　芽衣ちゃんか。今日は２人なんだ？」
「……ども」
マスターはいつものように、一人で店を切り盛りしていた。
この時店内には２組の客しかいなかったが、注文から調理から全て一人でやっているため、やはり忙しそうに店内を駆け回っていた。
それでも、自分の店に来てくれる客には全員、来店と同時に声をかけているのだった。
マスター曰く、それが客に対する最低限の礼儀だそうだ。
「んじゃ、そっちの２人がけの席のどれでもいいから座ってて。あと、分かってると思うけど水はセルフでね」
「は～い！」
「……案内してくれないのか？」
「マスターは忙しいの！　ほら、座ろ？」
「……まぁ、確かに忙しそうだ。仕方ないか」
２人は、店内のやや奥まった場所に位置する２人がけのテーブルを目指して歩き始めた。
そしてそこに、ちょうど向かい合わせになるように座る。
椅子の配置のせいで、どうしてもそうなってしまうのだ。
「……向かい合わせだね？」
芽衣は、そうなってしまった事で変に緊張してしまっていた。
「それが？」

しかし周一は、そんな芽衣の気持ちなど知ってか知らずか、いつも通りの調子で返す。
「あっ……ううん。別に……何でもないよ」
「……どうしたんだ？　最近のお前、ちょっとおかしくないか？」
「えっ？　えっ？　そ、そう……かな？」
「今だってそうだ、何だって緊張してんだよ。そんな必要ねぇだろ？　毎日のように顔合わせてるのに」
「むにぃ……」
普段と違う芽衣の態度に違和感を覚え、彼女を問い詰める周一。
しかし、マスターがそこに割って入ってきた。ようやく手が空いたらしく、注文を取りに来たようだ。
「はーいそこまで～。芽衣ちゃんの気持ちも考えないでそんな風に問い詰めるのはどうかと思うよ、僕は」
「マスター……」
「そうですけど……最近おかしいんですよ、こいつ」
「おかしいかどうかはキミが決める事なのかな？」
「うっ……。そ、そういうわけじゃ……」
「ならいいじゃないか。ほら、芽衣ちゃんはシャイなんだよ。男の子と向かい合うだけで萎縮しちゃうって娘、結構いるじゃない？芽衣ちゃんもそんなんなんだよ、恐らくね」
「はぁ、そんなんなんですか……」
「そうだよ。少なくとも、キミよりは女性経験豊富だと思うし、これくらいは分かりますよ」
そんな風に周一を説得したマスターは、視線を芽衣の方へ向けてこう囁きかけた。
（こんな感じでいいかな？　彼のほうも納得したみたいだし）
（うん、ありがとね！）
目配せを終えたマスターは、思い出したかのように注文を聞く。
「あぁっとそうだ、何にするかもう決めた？」
「いえ、まだです」

「んじゃ……、僕が何か適当なのみつくろってあげる？」
「マスターおまかせ、ってやつ？　じゃ、それでお願い！　シュウくんもいいよね？」
「ああ、別にいいぞ。決めるのも面倒だから、決めてくれる方がありがたい」
「オッケー。マスターこだわり１つ入りまーす！」
いつものように誰もいないはずの厨房に注文内容を叫ぶマスター。
その行動に疑問を持った周一は、当然のごとく彼に指摘する。
「いや、誰に言ってんですか」
「んー？　自分に」
「……はぁ、そうですか」
マスターの個性は相当なもので、さしもの周一も唖然としてしまった。

数分後、マスターは巨大な六角形のガラス容器に入ったパフェを持って２人の座っているテーブルに現れた。
「うわ～、大っきぃね～！」
「でかっ！！　何だこりゃ！？」
「ふぃ～、よっこらしょ。うひー、重かった……」
思わずマスターも、テーブル上に置く際に声を出したほどであった。
それほどまでに巨大なこのメニュー、名を『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』と言い、この店の常連のみが注文できる裏メニューである。
直径２５ｃｍ、深さ３０ｃｍの六角形の容器に込められた季節の果物やアイスクリーム、そして何故か入っているトリュフの輪切り、これらを一度に大人数で堪能できるメニューだ。
ちなみに、注文する際のキーワードは『暇つぶし』だそうだ。
「お待たせいたしました。当店の隠しメニュー『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』でございます。ごゆっくりお

召し上がり下さいませ」
　マスターは、『ごゆっくり』の部分をやや強調しながら言い、足早にその場を去っていってしまった。
「凄いねぇ～！　ねね、食べよ？」
「お、おう……。つーか、食えるかな？　こんなにたくさん……」
「大丈夫だよ！　男の子なんだから！　ね？」
「どういう理屈だよそれ……。まぁいいや。とりあえずはこの黒いのから……」
　周一は恐る恐る、その巨大なオブジェの先端部分に乗っている黒い物体に手を伸ばした。
「……何だこりゃ？　果物じゃなさそうだし……」
「あーそれねぇ、トリュフなんだよ。ここの名物って『ジャンボトリュフパフェ』だからね」
「マジ！？　俺、一度でいいからそういう珍味っての食ってみたかったんだよなー。よし、食うぜ！」
　そう言うと周一は、まるで子供のように『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』に手を付け始めた。
　そんな周一の様子を見ていた芽衣はこう呟いた。
（シュウくんって、こんな面も持ってたんだ……。意外だなぁ……）
　確かに、普段の彼からは考えられない行動だ。
　……その時であった。突然、周一から声がかかった。
「芽衣も食えよ。無くなっちまうぞ？」
　そう言われて我に返った芽衣は彼の方に向き直った……が、彼の顔を直視する事は出来なかった。
　それというのも、周一は夢中で『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』と格闘していた事で、口の周りがクリームだらけであったのだ。
　芽衣は、思わず露骨に彼から目を逸らしてしまった。
「な、何で目ぇ逸らすんだよ？　俺の顔に何かついてるのか？」
「ついてるよ～！　も～凄いよ？　鏡持ってないの？」

「持ってるわけないだろ。あるならよこせ」
クリームまみれで真顔になる周一であったが、そのギャップからか相変わらず彼の顔を直視できない芽衣であった。
芽衣は視線を逸らしたまま、自分の荷物から鏡を取り出し、周一に手渡した。
「……俺って、さっきからこんな顔だった？」
鏡を見て、ようやく自分の状況が把握できた周一は、備え付けの紙ナプキンで口のまわりを拭きながら芽衣に尋ねていた。
「うん。でもビックリしちゃった。シュウくんって、意外と子供っぽいところあるんだねー。……あ、まだついてるよ？」
「お、そうか？」
「ちょっと動かないで。ボクが拭いてあげるから」
そう言うと芽衣は、テーブルに備え付けられているナプキンを1枚取り、周一の方へ手を伸ばした。
その時……彼女の左手は周一の頬に触れていた。
右手でナプキンを持ち、彼の顔にまだ残っているクリームを探している。
「ちょ……もういいって。取れただろ？」
やや狼狽しながら周一が言う。
芽衣のほうは、周一の顔をなめるように見回している。
表向きの理由は、まだついているクリームを拭くという事であろうが、彼女の真意は別のところにあった。
「まだなのー！　黙っててってば。……あ、ここね」
ようやく顔についていたクリームを見つけたようだ。
しかし彼女は、ナプキンではなく自分の指をそこへ持って行った。
「ちょいちょい、っと……。はい、取れましたー」
「お、悪い。……つーか、何でそれ使わねぇんだ？　限りある資源を無駄にしやがって」
「いーのいーの！　じゃボクも食べよーっと」
芽衣は、何事も無かったかのように『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａ

ｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』へと手を伸ばした。
周一がすでに半分ほど消化してしまったようではあるが、それでもまだかなりの量が残っている。
彼も、そんな芽衣につられて再び『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』と格闘を始めた。
「結構２人で食うといけちまうもんだな。最初見たときは普通に無理だと思ったけど」
「そうだねー。甘い物は別腹って言うしね。……でもボク、トリュフ食べてない……」
「俺に言うな。お前が食わないのが悪いんだ。俺は何も悪くない」
「うう……またそーゆーこと言う……」
「うっせ。別にいいだろ？　俺が何を言おうと」
聞き慣れた言い回し。周一は相変わらずであった。
芽衣の手は、その言葉により止まってしまったが、彼の方は残り少なくなった『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』をつついていた。
そして……。

「……っか～！　食ったぞーちくしょー！」
いつの間にか周一は、あれだけあった『最強パフェ列伝・Ｈｅｘａｇｒａｍ　Ｅｄｉｔｉｏｎ』を全て平らげていた。
「いやいや、よく食べたねぇ。ご苦労さん。ほい、あったかい物でもどうぞ」
そこにマスターがホットコーヒーを持ちながら現れた。
６月の梅雨時で、あれだけ冷たい物を食べた２人の体が冷えている事を想定していたのだろう。
「あ、どうも。んじゃ一杯もらいます」
一人でほぼ全てを平らげた周一は、やはり体に冷えを感じていたようで、２つ返事でマスターの施しを受ける事になった。
「ふぅ……あったけぇ。……芽衣？　お前はいいのか？」

芽衣は先程の周一の言葉を聞いてからこの時までそのままの姿勢を続けていたが、今の言葉でようやく我に返った。
「えっ？　あ、コーヒー？　ん～ボクはいいや。そんな寒くないし。でもシュウくんすごーい！　ほとんど一人で食べちゃったでしょー？」
「まぁ……な。俺って、意外と甘い物好きだったんだな」
「そうみたいだね。じゃあ～……今度ボクが、そんなシュウくんに何かお菓子でも作ってあげよっかなぁ～……なんて」
「……お前が？　出来るのか？」
「あー！　バカにした！　ボクだって一応女の子なんだから、ちょっとは出来るもんっ！！」
「そいつは楽しみだ。期待しないで待っててやるよ」
「……むにぃ」

会計を済ませた2人は、店の外に出た。
相変わらず空模様は優れない。分厚い雲が空全体を覆っているようであった。
「くそ、こりゃそろそろひと雨来るかもなぁ……」
「傘なんか持ってきてないしなぁ……。途中で降られちゃったらどうしよう……」
「……何なら送ろうか？　お前の家まで」
「えっ？　……いいの？」
「めんどくせぇけど、ここでお前をほっといて後でグチグチ言われたくないしな」
「うぅ……そんな事言わないよぉ」
「……で？　乗るのか？　乗んねぇのか？」
「あー、乗る乗る！」
「わかった。ちょっと飛ばすからな、落ちても知らねぇぞ！」
「うん！　しっかりつかまってる！」
「オッケー！　行くぞ！」

周一の自転車は2人を乗せて風を切るように走り出した。
これは、大学合格記念に親から買ってもらったものである。
元来飽きっぽい性格の周一ではあったが、自転車に関しては例外であり、自宅から大学までの15kmはある道のりもこれを使って通っている。
そして、どうやら彼は自分の力で動かす乗り物以外を信用していないらしい。
これは彼の性格にも起因しており、本当に信じられるものは自分のみという考えがそうさせているのだ。
「うわ〜！　速い速い〜！」
「そりゃそうだ！　陸上部上がりの俺がこいでるんだからな！　もうすぐ到着するぞ！」

そして3分後……。
「ほい、到着！　さー降りた降りた」
徒歩で10分以上はかかるはずのカフェから芽衣の自宅までの道のりを、彼の自転車は3分で終えてしまった。
「シュウくんありがとー！　すっごく早かったよ！」
「礼を言われる筋合いはない。これくらい朝飯前のさらに前の食前酒だ」
「でも……もうちょっとあのままでもよかったかなぁ……なんてね」
「ん？　何か言ったか？」
「ううん、何にも言ってないよ？」
「そっか。んじゃあ俺はもう帰るから。また明日な」
「うん、ばいばーい！」
周一は芽衣に別れを告げると、目にも止まらぬスピードで去っていってしまった。
「ふぅ〜……」
芽衣は、冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出して一息ついていた。

「ボクでもあんなに積極的になれるんだ……。まだまだ音遠ちゃんにはかなわないけどね」
今日の行動を一つ一つ思い返しているのだろうか、彼女は天井を見上げながら何やら呟いていた。
彼女は、どこにでもいる普通の女の子だ。引っ込み思案でもなければ、活発でもない。
よって、周囲の人間の評価は概ね『いい子』でしかなかった。
彼女自身はそんな評価を下されるのを嫌ったので、皆がやりたがらない仕事も積極的に引き受けて来た。
一人称が『ボク』なのも、積極性をアピールしたいがための彼女なりの判断であった。今ではすっかりそれが染み付いてしまっているようだが。
「また乗りたいなぁ……シュウくんの自転車に。気持ちよかったし、シュウくんにつかまってられるから……」
芽衣はふと、こんな事を呟いていた。
自分でも分かっている、彼への想い。それは、少しずつ確実に募ってゆく。
今はまだ抑えが効くが、抑え込むたびに彼女の胸の奥は痛みを覚える。

伝えられぬこの想い。純粋過ぎる恋心。悩み、苦しみ、傷つき……。
彼女は迷い込んでいた。未だ出口の見えぬ迷宮に。
それはあまりにも深く、そして遠く。
そこには音も無く、温もりも無く。
彼女はまだ迷っている。いつ終わるとも知れぬ、音の無い迷宮で。

第3章：Ｆｒｉｅｎｄｓｈｉｐ

この日もまた、雨が降る。
いよいよ本格的に梅雨に差し掛かってきたのだろうか、ここ数日は雨模様の天気が続いていた。
このような天気では、気分も晴れないというものだ。
みさきもまた例外ではなく、彼女にしては珍しく沈んだ表情を浮かべていた。
「まーた雨なのー？　……はぁ、よくもまぁ、飽きもせず降ってくれるわよね」
自分の部屋の窓から外界を覗きながらそう呟くみさき。どうやら彼女も雨はあまり好きではないようだ。
彼女は窓から離れ、机に向かう。
そして、ふと思い出したように携帯電話に手をかけた。
「そーだそーだ。アイツらにメールでもしとこっかな。まずはっと……」
どうやら、芽衣からの頼みを今思い出したようだ。
引き受けた以上は精一杯の事をするのが彼女の信条である為、この時の手回しは実に的確なものであった。
まず彼女は、和也と圭輔にそれぞれメールを送っていた。
文面はこうだった。

件名：お願い！

本文：アンタを男と見込んで頼みがある！
そーろそろ本格的にシュウのバカの性格改善に取り掛かりたいと思ってるんだけど、アイツってば全然聞く耳持たないじゃん？

それにね……、どうしても芽衣ちゃんがかわいそうになってきてさぁ、こっちも見てられないのよー。
だから！　シュウを遊びに誘うなり何なりして、なんつーかもっとこう、ちっとはマシな方向に導いてやってほしいのよー。
勿論、アンタら任せにはしないわよ。うちらも手伝うから、とりあえずそーゆー事でしくよろっ！

一方その頃、和也は都萌を家まで送っていた。
学校も違い、自宅もやや離れている彼らには、毎日会う時間を確保する事は出来ていなかった。
そのため、たまに会える時をとても大事にしているとのことだ。
「和也くん、またね……。今度はいつ会えるかなぁ？」
「すまん、おれも色々と忙しくてな。やっぱり1週間くらい空いちまうかも知れない……」
「そうなんだ……。さみしくなったらメールとか電話するからね……」
「分かってるよ。なるべく出るようにするから」
「なるべくじゃ嫌だよ……。絶対出てよ……？」
和也にはその時、都萌の目にうっすらと涙が浮かんでいるようにも見えた。
雨が降っていたのでそれと見間違えたのかも知れないが。
「わかったわかった。ちゃんと出るから。約束するよ」
「うん……。ごめんね。わがままで……」
「いいんだよ。それごとお前じゃないか。わがままな面でも認めなかったら、お前自身をも認めない事になる。だから気にしなくていいんだ」
「ありがとうぅ……。ふぇぇぇぇん……」
都萌の目に浮かんでいたものは、やはり涙であった。
堰を切ったように流れ出した大粒のそれは、雨に混じって地面へ

と吸い込まれてゆく。
「泣くなよ……。ほら」
そう言いながら和也は、指で彼女の涙を掬い取る。
彼にとってはこれは日常のことであるようだ。
……とその時、彼の携帯が震え始めた。メールを受信したようだ。
「ん……？　誰だ？　あ、みさきか」
先程みさきが送りつけたメールが今届いたらしく、和也はそれに目を通している。その間都萌は、和也の手を握っていた。
「……はぁ、シュウの奴も相変わらずってか。すでに改善する必要があるところまで来たってどうなんだよ。また忙しくなるのかよ……はぁ」
溜息混じりにそう漏らす和也。身近におらずとも周一の傍若無人ぶりを感じてしまったようだ。
和也と周一は高校時代から付き合いがあり、現在でも連絡を取り合っている。
彼らの高校はクラス替えの無い学校であった為、３年間同じクラスメイトを顔を合わせる事となっていた。
その中でも周一と和也、それに圭輔とみさきを加えた４人は特に仲がよかったようだ。
まずクラス編成時に、出席番号の関係で席の近かった周一と和也が意気投合し、さらにその中に、たまたま周一の隣の席だったみさきも加わった。
ひとり席の離れていた圭輔は、その後にみさきから紹介されていた。
しかしながら男性陣３人はみな性格が違う。それでいて、何故ここまで意気投合出来たのだろうか。
その答えは全員同じであり、『何となく』としか言わない。
言の葉には出来ない、心の奥底で通じ合う部分があるのだろう。
「シュウを遊びに誘ってくれ……か。そういや、最近あいつとはご無沙汰だったっけか」

みさきからのメールの内容を反芻する和也。と同時に、何やら思索を巡らすかのように、雨の降る夜空を見上げた。
雨雲が空全体を覆っており、そこに煌めくものは何もなかった。
「どこがいいかな？　圭輔とも相談してみるか」

一方その頃、圭輔は一人寂しく、傘も差さずに雨の降る夜道を歩いていた。
彼もまた周一たちと違う進路を選んでいたが、和也との決定的な違いは、隣を歩く心許せるパートナーの存在。彼には、それがない。
「はぁ～あ……。何でオレだけモテないんだぁ～！　シュウには芽衣ちゃん、和也にはともちゃん、兄貴には音遠ちゃん！　何でオレの周りにはこーもカップルだらけなんだぁぁ！！」
静寂を打ち破る、圭輔のやや芝居がかった悲壮なる叫び。
「世の中不公平だらけだぁ～！　こんな腐った世界に誰がした！　おぉ神よ！　あなたが神か、どこにいるのですか！？」
自分だけが独り者というこの現状が、彼にとっては最大の汚点のようだ。
しかしながらこの行動は、周りには人影はほとんど無かったにせよ、近所迷惑もいいところである。
叫んでから我に返った彼は、赤面しながら小走りにその場を去ってしまった。
……とその時、彼の携帯が鳴り響き、再び静寂を打ち破った。
どうやらマナーモードを解除しており、さらに設定音量も最大だったようで、着信メロディが盛大に流れる事になったのだ。
ちなみに着信メロディは、現在彼が必死になって見ているアニメのテーマソングのものだった。
圭輔は慌てて携帯を取り出してチェックした。
「わっとっと、誰だ？　……何だ、みさきか。……ちっと暗いな」
和也同様に、圭輔にもみさきが送ったメールが届いたようだ。
ディスプレイの明るさだけでは足りないと思ったのか、彼の足は

自然と街灯に向かっていた。
「なになに？　……ふ～ん、こないだオレに相変わらずとか言ってたわりに自分も相変わらずじゃねーかよ」
吐き捨てるように言う圭輔。彼もまた、身近におらずとも周一の近況を悟ったようだ。
「遊びに誘え……か。どうすっかなー。和也にも相談してみるか」

翌日は、昨日までとはうって変わって抜けるような青空が広がっていた。
しかしながら久々の晴天は、真夏を思わせるような暑さをも運んできてしまった。
いつもの様に学食に集まった5人であったが、冷房が効いておらず、何人もが密集している室内はあまりにも暑い。
たまらず外に出た5人は、わずかながらに吹いていた風を一身に受けた。
「っか～！　涼しい……。ってかアレはないな。この世の地獄だな。うん」
「ホントだよね～……。はぅ～、暑いよ～お兄ちゃ～ん……」
そう言いながら音遠は灯夜に寄り添ってくる。
「だぁあああ！　暑いならくっついてくるなってんだこの奇跡的馬鹿めが！　離れろ離れろこんちくしょー！　暑苦しいってんだよぉ！！」
叫びながら灯夜は拒絶の姿勢を見せる。当然だろう。この日の日中の気温は３０℃にも届こうかという勢いだ。
これだけ暑いのに、いつものように密着されたらたまったものではない。
「あぐぅ～、お兄ちゃんがいぢめるぅ～……。いぢめちゃイヤだぅ……。あうあう、泣いちゃうもん。うるるぅ……」
「知らん知らん！　俺はいぢめた覚えはない！　貴様が勝手にそう思ってるだけだろーが！　俺には何も関係ない！　うっさいから黙

りやがれってんだこの神秘的馬鹿めが！」
「神秘的馬鹿って……それはさすがに言い過ぎよー。あと……、お兄ちゃん？　その口調、シュウくんに似てない？」
「……あっと、そうかも」
「ちょっとー！　アンタまであんな性格になっちゃダメよー？」
「……は？　あんな性格って何だよ。俺の勝手だろうがそんなの」
自分が否定されたような気がしたのか、明らかに不満の表情をのぞかせる周一。
本人は、この性格が気に入っているのかどうかは定かではないが、それを改善する様相を一向に見せていない。
「またそー言う……。そろそろさー、真剣に考えようとは思わないわけアンタ？」
「残念だが、思わない。というか、逆に聞きたいね。俺は何を真剣に考えればいいんだ？」
彼はまだ分かっていない。ここにいる皆が周一の性格を変えようとしている事に。
この時みさきは、どれほど『アンタの性格を変えたいのよ！』と言いたかっただろうか。
目の前では芽衣が周一の性格のために悩んでいる。大切な友人が悩んでいるのを、姐御肌のみさきは放っておけないのだ。
しかしながら周一もまた、彼女の大切な友人だ。彼の将来を懸念するのならば、今ここで本当のことを話すべきであっただろう。
だが芽衣の事を考えると、こればかりは自分の口から言いたいと思っているはずだ。
ここでみさきが言うのは優しさではなく出すぎた真似、過ぎたおせっかいでしかない。
どちらを取るべきか。みさきは考えるまでもなくこう返した。
「……知らないわよ。自分で考えればいいじゃん」
彼女が出した結論はこうであった。
今ここで本当のことを話したら、芽衣の気持ちが彼に伝わってし

まう。
やはりこういった事は、本人の口から直接伝えたいだろう。
彼女はどちらも選ばなかった。いや、選んではいけなかったのだ。
芽衣も周一も、みさきの大切な友人であり、天秤にかける事などできやしない。
今はこれでよかったのだ。昨日の今日では和也も圭輔も動けてはいないだろう。
『周一の性格を変えるために全員が動いている』と言ってしまうのは、この時点ではまだ早い。

夕焼けが映える頃、和也はこの日の授業を終えて帰宅の途についていた。
歩きながら携帯をカバンから取り出すと、メールを1件受信していた。
送り主はやはり都萌であった。
「……1日ともたないってのか？　はぁ……。何とか時間作って会いに行ってやらなきゃなぁ……」
そのメールにはひと言「寂しい……」とだけ書かれていた。
彼女は一日でも和也に会えないとこうなってしまうようだ。
都萌が家で一人寂しがっているのを想像しながら、彼は自分の無力さをひしひしと感じていた。
「おれは……どうすればいいんだ？　シュウのことも考えなきゃなんねぇし……、はぁ」
彼の悩みの種は尽きる事がない。
「……って、そうだそうだ。明日は土曜日だったっけ。……あの事について相談してみよう」
そう言いながら携帯電話を取り出し、メールを作成する和也。
しかし彼はまだ携帯の操作に慣れていなかった。
大学入学とほぼ同時期に購入したため、まだ使用してから2ヶ月ほどしか経っていなかったのだ。

慣れない手つきでようやくメールを作成した彼は、圭輔へとメールを送った。文面はこうだった。

件名：どうする？

本文：みさきからメール来ただろ？シュウを遊びに誘ってくれって。で、どうする？おれじゃそんな気の利いたことできないから、お前に任せたいんだけどどうだ？決まったら返してくれ。じゃあな。

「おいおい翔司！　あの娘かわいくねぇ！？」
「うっひゃーマジだ！　よーしじゃあ圭輔！　ナンパしてこい」
圭輔は、バイト先で知り合った友人……森野翔司と行動していた。彼らは性格が似通っていたことから、出会ってすぐに意気投合したのだ。
しかし圭輔は、やはり来てほしくないのだろうか、自分がバイトをしている事は明かしているが、場所までは誰にも教えていない。唯一知っている者といえば、バイト先を同じとする彼くらいであろう。
そして今は、すれ違う女の子を見ながら2人で物色をしている最中であった。
「って、オレかよっ！　翔司が行けよー。お前のが母性本能くすぐるタイプだろ？」
「そんなバカな。お前のが万人受けするって！　背ぇ高いしさ！」
「ってオーイ。もういないし……」
「ったくよー。圭輔がモタモタしてっから……。そんなんだからお前だけモテねぇんだろーがよ！」
「うっせーやい！　卒業式に玉砕したどっかの誰かさんよりゃ数段マシだ！」

「……はぁ。あんなにはっちゃけてアピールしたのに、結局振り向いてくれないんだからな……。何でオレより実の兄がいいんだか……」
「……え？　実の兄がいい？　それってもしかしなくても……ん？」
言い終わる前に、圭輔の携帯が震え始めた。今度はちゃんとマナーモードにしてあったようだ。
「何だ、和也か……。あいつからメール来るなんて珍しいな。明日は晴れるな、きっと」
「高校のダチか何かか？　その和也って」
「ああ。ほかにもう一人いるんだけど、そいつと遊びに行くプランを練っておけだと。ってか！　和也はホントに鈍いぞ！　いまどき珍しいくらいの朴念仁だ！　……カノジョいるけどさぁ」
「そうかい。まっ！　オレら『モテないギルド』には関係ない話だよなー！　カノジョとかそーんな浮っついた話は！」
先程のナンパの件を棚に上げ、努めて明るく言い切った翔司に対して、圭輔は哀れみの目を向けながら諭すように言った。
「翔司……。お前は本当にそれでいいのか？　この現状に満足しているのか？　それではあまりにも寂しくはないか……？」
「圭輔……？」
彼はさらに続ける。
「お前は卒業式の日、その娘にちゃんと思いのたけをぶつけたのか？　第三者に代わりに言ってもらおうとか思わなかったか？」
熱のこもった説得が続く。翔司はただ、うなずく事しか出来なかった。
「……とにかくだ、どんな理由があったにせよ、一度決めたんならどんどんぶつかっていけよ！　特定の相手がいようが、奪うくらいの気持ちがなきゃ一生恋愛なんざできねーぞ！！」
さながら機関銃の如く、翔司に言葉を浴びせる圭輔。
こうなってしまうと、しばらくは止まらなくなってしまうのだ。
「あーわかったわかった！　わかりましたよ！　オレの事より、そ

の和也ってヤツのメールに返事してやれって」
しかしながら翔司は、こうなった圭輔の止め方を知っていた。
こうして他の話題を強引に振ることにより、彼の思考はそちらに向かうのだ。
「おっとっとそうだった。でも……どうすっかなー。まぁ……、たまには男同士でじっくり話し合う機会ってのを作ってみるか」
「おぉ？　お前にしては随分と熱血系な考えだな」
「仕方ないんよ。和也に合わせねぇといけないからな……」
「あー、そうか……。ってか、何で話し合いの機会なんか作る必要があるんだ？　遊びに行くならカラオケとかゲーセンとかでいいんじゃないか？」
「それについては……、触れてくれるな……。人助け、と言っておくが、それ以上は言えないな」
圭輔は珍しく言葉を濁した。周一のことを知らない翔司にまで話す必要がないと思ったのだろうか……。
「まぁ、言いたくないことだったら無理に聞かないけど」
「ん、悪いな。……よし、打ち込み終わり。送信送信っと……」
どうやら、話しながらもメールを打ち込んでいたようだ。
彼は和也と違い、携帯を持ち始めてからすでに3年以上が経とうとしているので、会話しながらでも文字を打つ事が出来るのだ。
その文面はこうだった。

件名：こうする。

本文：わざわざ悪いな。
無理に遊びに誘うよりも、誰かの家かなんかでじっくりと話し合うってのもたまにはよくないか？
男同士でじっくり、腹を割って話し合ってみようぜ？　ってかむしろオレはそうしたい。

任せるって言った以上、お前に否定の余地はないからよろしく。
日時については追ってまた連絡するからな。シュウへの連絡もオレがしておくよ。

圭輔からの返信メールを受信した和也は、それを小声で読み終えたあとにこう呟いた。
「そうか……。腹を割って話し合う、か。そういえば真剣に議論した事はなかったな。よし、それでいくか」

数日後、周一は圭輔からの連絡を受け、指定された待ち合わせ場所にいた。
せっかくの休日を潰されて、幾分不機嫌そうな表情を覗かせてはいたが、久々の親友との再会もあってか、内心はそうでもなかったようだ。
5分後、和也と圭輔がようやく合流した。
「っか～、お前早いな……」
「そうか？　え、だって、1時集合じゃなかったっけ？」
「何聞いてたんだよ。12時だって。何で1時間も間違えるんだよ？」
「いや、起きたらあと10分で12時でさ。やべぇ！　って思ってコイツでかっ飛んできたんだよ」
そう言いながら周一は、傍らの自転車を指差す。
使い込まれてはいるが、メンテナンスも欠かしていることはないようで、素人目にも整備が行き届いている事が良く分かる。
「……で？　どこに行くんだ？」
どうやら周一には、今日の計画が伝わっていないらしい。
和也はやや焦りながら圭輔に耳打ちをした。
（おいおい、どういう事だよ？　あいつなんにも知らないみたいじゃないか）

（これも演出のうちだ。変に言っておいたら、アイツ事前に回答を用意しとくかも知れねーじゃん。ドッキリ的にやっておけば、アイツの本音が聞けるかもしれないぜ？）
（お前……そこまで考えてたのか……）
「だから……どこに行くんだって聞いてるんだこっちは」
業を煮やした周一が再度聞く。
「おー悪い悪い。今日はな……、オレんちに行くぞ」
圭輔がそう言うと、周一は首をかしげた。
「何でまた圭輔の家なんだ……？　まー……、どうでもいいけど」

数分後、一行は圭輔の家の前にいた。
秋野家は3階建ての一軒家で、周辺の家の中でもかなり大きい部類に入る。
圭輔は、3階の部屋をすべて自分が使っていた。
「ま、上がれよ。今日はオレしかいないからさ、何時までいてもいいぞ」
そう言いながら、周一と和也を自宅に上げる。
圭輔は、2人が入ったことを確認した後、内側から鍵を閉めた。
3階の圭輔の部屋は、意外にも小奇麗にしてあった。
モノ自体は趣味の関係上かなり多かったが、それもしっかり片付いていた。
「ふ～ん……、何だよ、結構片付いてんじゃんか」
「へへっ、まぁな。あー、暑いだろ？　冷たい飲み物でも持ってくるよ」
「お、悪いなぁわざわざ」
「圭輔、おれも手伝うぞ」
「そうか？　んじゃ頼むわ」
圭輔と和也は、飲み物を持ってくるために一時的に部屋を出た。
さらに圭輔は、出掛けにエアコンのスイッチを入れていった。6畳ほどの部屋を冷風が包み込む。

一人涼しい部屋に残された周一は、圭輔の部屋を物珍しそうに眺めていた。
「……圭輔の奴、また一段とモノを増やしたな……。はぁ、すっげ」
それからしばらくして、圭輔はグラスを人数分、和也は2リットルのペットボトルジュースを持って現れた。
「待たせたな。さ……始めようか」
圭輔はそう言いながら、グラスにジュースを注いでいく。
「ん……？　始めるって何を？　ゲームでもすんのか？」
訝しげに周一が尋ねる。
（もう……言ってもいいよな？）
（ああ……そうだな）
周一の質問を無視するかのように、2人は何やら小声で話し始めた。
「おい……お前ら？」
「あー悪い悪い。始めるってのはだな……、今日はじっくりと話し合おうと思ってな……」
圭輔は、今日周一を呼んだ理由を今やっと話した。
彼はその言葉に少々困惑したが、すぐにいつもの調子に戻ってこう返した。
「あっそ。別にどうでもいいけどな」
「また出たな……それ。いいか？　こんな機会だから言ってやる。お前のその言葉で、心に深い傷を負った人がいるんだよ……」
「ふ～ん……。誰がどのくらいだよ。ってか、そんな事くらいでいちいち気にするなって言いたいね、俺は」
やはり、彼は相変わらずであった。高ぶる感情を必死に押し殺しながら、圭輔はさらに続けた。
「誰だかってのはまだ言わない。……百歩譲ってお前は、その人を傷つけたことを知らなかったとしよう。だがな？　これくらいはわかるだろう？　お前の性格はどこか変だって」

このようにはっきりと指摘され、あからさまに不服の表情を浮かべる周一ではあったが、彼は冷静にこう返した。
「おかしい？　俺がおかしいかどうかってのはお前が決める事なのか？」
「オレだけじゃない。和也もそうだし、他のみんなもそう思ってる」
「ああ。だからこれはみんなの意見だ。圭輔ひとりだけの意見じゃない」
「……で？　だからそれがどうしたんだっての」
からかっているのか、それとも本当にわかっていないのか、周一は平気な顔で2人に言う。
圭輔はそんな周一の態度に思わず立ち上がりそうになったが、そこを和也が制する。
「ほれ、座れって。しかしなぁ……お前には何て言ったらわかってもらえるんだろうなぁ……」
和也は思索を巡らせ、おもむろに言葉を紡いでゆく。
「こうなったらアレだ、単刀直入に言うぞ？　……お前の性格は、社会に出たら間違いなく相手にされなくなる性格だ。そしてその性格が、ある人を傷つけた」
「……それで？」
「おれらはお前の性格を何とかして変えてやろう、いや、変えるとまではいかなくとも、お前自身が変わろうと思えるようにしてるわけだ。そこまではわかるな？」
彼はそこまで、至極冷静に尋ねた。しかし周一は彼らの予想を超越した返答をしたのだ。
「わからないな。まず、俺の性格を変えようってところがわからない。何でそんなことする必要がお前らにあるんだ？」
周一はやや怒気を含みながら、さらに続ける。
「というか、俺はそんな事いつ頼んだ？　頼みもしないことを勝手にされてもこっちは迷惑なだけなんだが」
予想外の返答。こちらが良かれと思ってしてきたことを全て否定

するかのような非情な言葉。
「どうしてだよ……？　ありえねぇよ……」
ようやく搾り出したかのような、和也の弱々しい声が小さく残る。
しかし周一は悪びれる様子もなく言い放った。
「ありえねぇのはお前らの方だ。いや、ありえねぇって言うよりどうかしてるな。お前らの勝手な都合を押し付けてくるあたり、どうかしてるぜ」
「勝手な……都合だと？」
「あぁ、そうだよ。それに、俺は誰かを傷つけたとかっていう自覚はない。そいつが勝手にそう思ってるだけだろ？　俺は悪くない」
この時点で、圭輔の怒りはすでに頂点に達していた。
次に彼の気に触れるような言葉が出たならば、もう止まらないだろう。
しかし……周一はそんな圭輔の変化に気づく事もなく、さらに追い討ちをかける。
「ったくよぉ、被害妄想もいいとこだぜ。おかげでこっちが悪者呼ばわりされる。ホントどうかしてる……ぜ……？」
周一がそこまで言い終わるのと同時に、圭輔は彼の胸倉を掴んでいた。
高ぶる感情を、この時まで必死に抑えてきた。
しかし、それすらももう限界を突破してしまっていた。
「てめぇ……それ本気で言ってるのかよ。芽衣ちゃんの気持ちを、考えてやったことはあるのかよ！」
「け、圭輔……」
「ちょ……落ち着けって。つーかさ、俺が傷つけたとかって奴は、芽衣だったのか？」
周一は圭輔を引き離しながら言った。
その言葉に我に返ったか、彼はグラスのジュースを一口飲んで喉を潤すと、周一の目を真っ直ぐに見据えた。
「……悪い。感情でもの言っちゃダメだよな……。そうだよ、芽衣

ちゃんはな、ずーっと独りで悩んでたんだぞ？」
「そう……なのか？」
「あ、あぁ。ほら、いつだったか、あの娘が不良にからまれてたじゃんか。あの時真っ先に助けに入ったお前が、芽衣ちゃんには凄く格好よく見えたんだと」
「……あの時か」
「でもな、最近のお前はあの頃とは違うんだってよ。だから、彼女はあの頃のお前に戻って欲しいらしいんだ。そのためにあの娘、お前に色々してきたみたいじゃんか」
「確かにそうだが……ちょっと待て。そりゃどこ情報だ！？」
「みさきに決まってるだろーが。芽衣ちゃん、お前をあのカフェに誘ったんだってな」
「確かに、こないだ一緒に行こうって誘われたな。どういう風の吹き回しかと思ったけど、あいつ言わなかったし。あと、何でか知らないけどやたら緊張してたみたいだったぞ」
「やっぱそうかぁ……。なぁ和也、この先はやっぱ言っちゃまずいよなぁ……？」
「まずいな。ヘタにごまかしても逆効果だけど、これはやっぱり本人の口から言った方がいい」
「ん？　何がまずいんだ？」
「あーいや、何でもない。とにかくだ、芽衣ちゃんは、お前の性格をあの頃のに戻したいために色々頑張ってるんだよ」
「ちょっと待て。とりあえずお前らが俺の性格を変えたいってのは大体わかった。でもな？　お前ら勘違いしてるぞ？　俺はあの頃から何も変わってない！」
「変わってない、だと？　して、その心は？」
「いやだって、他に誰も助けようとする奴がいなかったから仕方無しに……。面倒だったけど、あそこで芽衣をほっといて周りの人間からあとで変なこと言われたくなかったしな……」
「ほう……。それは本当だな？」

「嘘ついてどうするんだよ。本当も本当だって」
「よし……わかった。お前はどうしようもない奴じゃない……。それはオレらが保証する」
「ああ……。その言葉が聞けただけでも、今日この話し合いの場を持った価値は充分だ」
「な、何だよ改まって……。お前らも何かおかしくないか？」
普段と違う友人たちの態度に、不信感を覚えながら尋ねる周一。しかし圭輔は得意げにこう返した。
「おやおや？　おかしいかどうかはお前が決めることなのか？　それに、そう思ってるのは恐らくお前だけだぞ？　オレらにはなーんにもおかしい所はない！」
こうなってしまっては止まらない。圭輔の小芝居を混ぜた、演説にも似た返事が展開されるのであった。
そしてそれは、まだまだ続く。
「例えお前が今のオレの言葉で機嫌を悪くしようが、オレには関係ないからな。そこんとこはご了解あれ」
「う……。ちっくしょ、俺の真似しやがって……」
自分がいつも使っている言い回しを逆に使われ、あからさまに憮然とした表情を浮かべる周一。そこに、和也がこう声をかけてきた。
「なぁシュウ？　これでわかったろ？　今、圭輔はお前の真似をしたんだ。そんな圭輔をどう思った？　すっげぇムカつく奴だと思っただろ？」
「……ぶん殴りたいくらいにな」
「ほら、やっぱり。お前自身は気づかずにいたかもしれないが、いつもこうだったんだ。頼むよ、芽衣ちゃんの気持ちを考えてやってくれよ……。彼女はお前の事が……」
「ちょーっと待て和也！　それから先はオフレコだ！　つーかお前が言うなっつったんだろーが！　いきなり忘れるな！」
思わず口を滑らせそうになった和也を大慌てで止めた圭輔。
そんなやりとりを見た周一は不思議そうな表情を浮かべたが、あ

まり気に留めた様子はなさそうだった。
「……確かに俺はいつもそんな風だったな。それが結果的に芽衣を傷つけたんなら、俺はあいつに酷い事をしたな……。やっぱ謝るべきかな……」
ようやく自分のしてきた行為を反省したのか、うつむきながら申し訳なさそうに呟く周一。
それを見かねた圭輔は、周一の肩に腕を回しながら言った。
「そんなしょげるなよ？　そこに気づいただけでも大したもんだって。確かに芽衣ちゃんには謝るべきだけど、それに気づいたお前なら大丈夫だって」
「圭輔……」
「間違いとか過ちなんてのは、生きていく上では避けては通れない。でもな？　そうなっちまったら、また同じことを繰り返さなければいいんだ」
「あぁ、その通りだ」
「現にお前は、『誰かを傷つけた』っていう間違いを『反省』できたじゃないか。その事実だけでも凄いと思うぞ？」
そこまで言ったところで、今度は和也が逆方向から周一の肩に腕を回してきた。
「たまにはつまづくことだってあるよ。おれだって過去に医者から『もうテニスはできない』って言われてすっげぇ凹んださ……」
和也は、ゆっくりと自分の過去を語り始める。
「おれにはテニスしかないと思ってたからな……。そんな時支えてくれたのは周りの奴らだった。都萌なんか、自分の大会があるにも関わらず、ずっとおれの隣にいてくれたんだ」
「くぅぅ！　愛だねぇ！　うらやましいねぇ！！」
圭輔の茶化しにも負けず、和也はなおも続ける。
「おれらがこんな風に話し合いの場を持たなかったら、きっとお前はいつまでもあのままだった。誰かを傷つけても平然としてたはずだ」

「和也……」
「でも今のお前は、芽衣ちゃんに謝ろうと思っている。これはお前一人じゃ思いつかなかったはずだ。おれは親友であるお前が大切だから、他の誰かを傷つけてほしくなかったんだ」
「和也だけじゃないぜ。もちろんオレもそう思ってる」
「今日はすまなかったな……。いろいろ気に障ったりもしただろ……？」
「和也……、圭輔……。こんな俺でも、親友だって思ってくれるのか……？」
「何を今さら……。当たり前だろ？　そんな簡単なことでオレらの友情がなくなるとでも思ってたのか？」
圭輔はそう言うと、周一と組んでいた腕を外した。和也もそれに続いた。
そして3人は堅く手を握り合った。どんな事象にも脅かされない、友情の絆を再確認するかのように。

「よーっしゃ！　じゃー久しぶりにカラオケでも行くか！？」
「お、いいねぇ。シュウも行くよな？」
「当たり前だろ？　行くに決まってんじゃんか。んなこと聞くな！」
「よっしゃー！　今日ははっちゃけるぜー！」
「お前の場合は『は』じゃなくて『も』だろ？」
「おいおい、そりゃねぇぜ～」
「そんなのどうだってよくねぇ？　楽しけりゃいちいち気にすることもねーだろーよ」
彼らは、街のカラオケボックスへと消えていった。

街の喧騒のなかで、ひときわ輝く3つのそれは、よりいっそう輝きを増しながらつながりを強めてゆく。
決して切れることもなく、また、消えることもなく。
雲の隙間から顔をのぞかせる月明かりが、彼らの歩むべき道を示

していた。

第4章：Twin Hearts

コンコン……コン。

ある雨の降る夜、申し訳なさそうにドアをノックする音が響く。
「お兄ちゃーん、入るよ？」
「あん？　音遠か？　入りたいなら勝手に入れ」
「は～い！」
心底嬉しそうな声を発しながら、彼女が灯夜の部屋のドアを開ける。
そこには風呂上りで髪型を整えている、大好きな兄の姿があった。
音遠は、そんな彼の隣に座り込んだ。
「ねぇねぇお兄ちゃん？」
「あん？　何だよ……」
灯夜は髪を整えながら、面倒くさそうに聞き返す。どうやら少し眠そうでもあった。
「あのね、あのね……」
しかし彼女は、言葉を詰まらせながらたどたどしく聞いてくるだけだった。
そんな彼女に業を煮やした灯夜は、ますます機嫌を悪くしたかのようにこう言った。
「だああ、一体何なんだよお前は！？　何が聞きたいんだっての」
「あうぅ……。お兄ちゃんはぁ、私のこと……好き？」
「は～ぁ？」
彼女がようやく絞りだした言葉は、彼が普段から毎日のように聞かれている質問事項であった。
呆れ返ってしまった灯夜は眉間にしわを寄せた表情になったが、音遠の表情は真剣そのものだ。
「私は……大好きだぅ♪　はぐ♪」

そう言いながら抱きつく音遠。風呂上りで火照っていた彼の体温が、彼女にも伝わってくる。
抱きついたままで彼女は、静かに呟いた。
「好きになるのは……自由でしょ？　実の兄妹でも……」
ともすれば外界の雨音にかき消されてしまいそうな、とてもか細い声ではあったが、常人を超越した聴力を誇る灯夜の耳ははっきりとその声を捉えていた。
「まぁ……咎めはしねーよ。俺だって……そんな風にはっきりと『好き』って意思表示してくれる娘がこんな近くにいるってのは、やっぱ素直に嬉しいし……うん。嬉しいな、うん」
抱きついたままの彼女の、２つに結んだ髪のひとつに触れながら恥ずかしそうにうなずく灯夜。
長い間想われているためか、彼の方も少しずつ妹である音遠に興味を持ち始めているようであった。
だがやはり彼らは血のつながった双子の、正確には三つ子の兄妹だ。いずれはこの生活にも終止符を打たねばならない。
それは灯夜にはもちろん、音遠にもわかっていることだ。
しかしながら心の中では『このままではいけない』と思いながらも、それを享受している感があるのは否めない。
どちらにしても、しばらくはこの生活が続くことだろう。

その体勢を５分ほど保ったのち、音遠が思い出したように口を開いた。
「あ……そうだ……。芽衣ちゃんから頼まれてたことあったんだっけ……」
「ん？　芽衣ちゃんが？　あぁ、昨日だかに女どもで内緒話してたっけ。そん時ゃやたら芽衣ちゃんが怖かったな。『男の子には関係ないんだから気にしないでよぉ！』って」
灯夜は芽衣が豹変した場面を思い出し、背筋を震わせた。
「おーこわ、くわばらくわばら。んで？　何なんだ頼まれてた事っ

て？」
「えっとねぇ……。シュウくんの性格を変えて欲しいんだって」
「あー……はいはい。やっぱあいつの性格がネックなんだなぁ。付き合うとなると苦労しそうだなぁ……。あと、お前はそろそろ離れやがれ。暑苦しい……」
音遠を引き離しながら、全てを悟ったかのように呟く灯夜。
唯一と言ってもよい、大学での周一を知る同性の友人だけに、彼のことについては和也や圭輔にも劣らないほどわかっているつもりだった。
もちろん、芽衣が周一に好意を抱いているという事も。
「あぐぅ……。もうちょっとくっついてたかったのにぃ……」
「んで？　芽衣ちゃんはお前に何してほしいって？」
「うん、あのね？　『男の子との接し方教えて！』だって」
「男の子との接し方ねぇ……。はっ、まさかお前、いつも俺にやってることをそっくりそのまま言ってない……よな？」
やや焦りながら尋ねる灯夜。しかし彼女はあっけらかんとこう言ってのけた。
「えー？　ダメなのぉ？」
「当たり前だろーがこの奇跡的馬鹿！　『きゃう～♪』とか言いながら飛びついてくる芽衣ちゃんなんか想像したくねぇ！　彼女のキャラに合わねぇし！　……あ、やべ」
言い終わってから、彼はその発言が失言であることに気付いた。
『芽衣には似合わないが、音遠には似合ってるよ』と遠回しに言っているようなものだったからだ。
だが彼女は気付いていないようだった。
その後、彼は咳払いを一つ挟んでから、淡々と言葉を紡いだ。
「まぁ……何だ。誰々との接し方なんてもんは、他人に教わるようなものじゃないと思う。そんなの人それぞれじゃねぇか。自分で見つけて初めてわかるんだよ」
そこまで言って、灯夜は自分のベッドに腰をかけた。

「先入観だけで決めてた人間の印象が、ちょっと話し合う事で全然違う印象になったってのはよく聞く話だし……な」
「ほえ～……」
「芽衣ちゃんには芽衣ちゃんなりのやり方がある。もちろんお前にも、お前なりのやり方がある。俺に引っ付きたがるってのはその最たる例だな」
「えへへー♪」
「だからさ……、お前が何言ったって仕方が無いんだよ。芽衣ちゃんは、自分なりにシュウのいい所を見つける。そんでもって自分の想いをぶつける。これで解決しないか？」
「う～ん……。よくわかんないけど、お兄ちゃんがそう言うなら、明日芽衣ちゃんにそう言ってみる」
「そうだな……。でも、俺の名前は出さない方がいいぞ？　女の子だけの内緒話にしときてぇみたいだしな」
「うん、ありがと！　ゴメンねお兄ちゃん、眠かったのに相談に乗ってもらって」
「いーっていーって。困ってる時はお互い様だろ？」
「さすがお兄ちゃんだぅ……。大好き♪」
再び灯夜に抱きつく音遠。彼もまた、優しく彼女を受け入れる。
雨音だけが静かに響く部屋の中で、2人の刻はゆっくりと流れてゆく。
重なり合う唇に、偽りは無かった。

翌日は、昨日までの雨天が嘘のように晴れ渡っていた……と同時に、今年一番の暑さをももたらした。
真夏を思わせるかのようなその暑さも、夕方には収まるかと誰もが想像したが、夕焼けが映える時刻になってもそれは変わることはなかった。
むしろ、西日のせいで余計に暑くも感じられた。

この日の授業をすべて終えた音遠は、いつものように兄である灯夜に寄り添いながら帰路についていた。
「あ～、今日も終わったねぇ？」
「ああ……。俺の場合は別の意味で終わったかも知れないが……な」
「うにゅぅ……。ゴメンねぅ。今日は起こせなくて……」
「いーっていーって、気にすんな。寝ちまう俺が悪いんだから……あっははは……」
やはり灯夜はこの日も、午後の講義中に眠ってしまったようだ。
しかもこの日に限っては音遠も眠ってしまっていたので、兄妹仲良く隣り合わせで寝ることになったのだ。
そんな自分を嘲笑った彼は、その後思い出したようにこう言った。
「あっ……そうだ。お前昨日のこと芽衣ちゃんに言ったか？」
「……はっ！　いっけなーい、忘れてたぁ！」
「ったくこれだから……。しょーがねぇな、今ならまだ学内にいるかも知れないから、ケータイで呼んでみろ」
あまりの暑さのせいか、昨日相談したことを芽衣に伝えるのを忘れてしまっていた音遠は大慌てで彼女の携帯に連絡を入れる。
すると、程なくして彼女からの応答が返ってきた。
「もしもし？　音遠ちゃんじゃない。どうしたの？」
「ゴメンねいきなり電話しちゃって。あのね……？　ちょっとお話があるの。時間……取れる？」
「うん、ボクも今日はこれで終わりだし。いいよー！　で、今どこにいんの？」
「外の掲示板のとこだよ。お兄ちゃんもいるよ♪」
「そりゃそーでしょ……。てゆーかボク、音遠ちゃんが一人でいるとこなんて見たことないよ？　……あ、外の掲示板ね？　わかった、すぐ行くから待っててね！」
「うん、じゃまた後でね！」
そこで通話を切る。無事に用件が伝えられたことで、音遠はほっと胸をなでおろした。

数分後、見覚えのある人影が現れた。
強い西日が精製した長い影の本体は、芽衣であった。
「お待っとう！　……お話って、なに？」
「あー、そのことなんだけど、立ち話もアレだからさ、例のカフェにでも行かない？　そこでゆっくり話そうよ」
と、灯夜が提案する。芽衣はやや不思議そうな顔をしたが、提案を断る理由もなかった。
「うん、いいよ！　そういえばこの３人で行くのは初めてだったよね？」
そう言いながら歩を進める３人。カフェに着くまでの間、彼らはとりとめのない話を続けていた。

「いらっしゃいませ！　おっ、今日は３人なんだ。……って、２番の食器を下げなきゃ！　あ、３人ならそこの４人がけのとこに座ってて！　決まったら呼んでね！」
「マスター！　こっちのスパークリングティーまだぁ？」
「おーい、コーヒーのおかわりお願いな。ええと、この『きりまんじぁろ』で」
「はいはい！　くぁーっ、今日はやりがいがあるなぁ！　まったくもって！」
修羅場。まさにその言葉が似合っていた。
店内に２０脚はあろうかという椅子は大部分が埋まっており、その全ての客を一人で相手していたマスターは、いつにも増して忙しそうに店内を駆け巡っていた。
ちなみに彼は本名を『増田六（ますだりく）』といい、マスターの呼び名は苗字からつけられていた。今ではすっかりマスターで定着しているようだが。
マスターに言われるがままに、空いていた４人がけの席に座った３人。

さすがに彼の様子を察してか、誰も注文するものを決めようとはしなかった。
「あ、俺水とってくるよ。おしぼりもね……」
代表して灯夜が、セルフサービスの水とおしぼりを取りにいった。
その道すがら、灯夜は厨房に下がろうとしているマスターとすれ違った。その時マスターはこう声をかけてきた。
「今日は両手に花かい？　う～ん、若いねぇ……。ま、がんばってわがままお姫様たちをエスコートしてあげてな、イロオトコさん？」
言い終わるとマスターは、足取り軽く厨房へと引っ込んでいく。
灯夜は、そんな彼を見て唖然とするしかなかった。
「おおっといけねぇ、水水っと……」

灯夜が水を取りに行っている間、音遠と芽衣は向かい合わせになりながら話を始めていた。
「ねぇ音遠ちゃん？　お話ってなーに？」
「えっとねぇ……。昨日、シュウくんのことについておに……ごめん、いろいろ考えてみたんだ」
「あ……シュウくんのことで？」
「うん。えっとね……、うんとねぇ……」
次の言葉がなかなか出てこない。どうやら、昨日の今日でもすでに忘れてしまったようだ。
口ごもる彼女に、水とおしぼりを持って戻ってきた兄が助け舟を出した。
「だあぁ、全くお前はしょーがねーな……。俺が代わりに言ってやるよ！」
それぞれに水とおしぼりを配りながら椅子に腰を下ろす灯夜。その水を一口飲んだ後、ゆっくりと語り始めた。
「はぁ～、冷たい。あのな芽衣ちゃん？　芽衣ちゃんがシュウの性格を変えたいってのはわかった。その気持ちは……すっげーよく分かる！」

持っていたグラスを叩きつけながら、何故か熱弁を振るい始める灯夜。
芽衣と音遠は彼に気圧され、目を白黒させた。
「だから、こいつとかに相談したのも分かる！　こいつには『男の子との接し方教えて！』って聞いたんでしょ？」
「う、うん……」
「んだけどさ、誰々との接し方なんて人それぞれじゃないかな？　こいつの場合は、俺に引っ付きたがるわけだけど……」
「確かに、ね」
「それは『こいつ』が『俺』に対してだけの接し方であって、実際シュウとかには引っ付かないじゃん？」
「うん！　私はお兄ちゃんにしかはぐ♪　ってしないもん♪」
「誰々との接し方ってのは人それぞれなんだし、他人から教わる物じゃないと思う。自分で見つけて初めて分かるものなんだよ……」
全てを悟ったように語る灯夜。彼はなおも続ける。
「こいつから教わってそれを鵜呑みにしてそのまんまやったところで、それは芽衣ちゃん個人の行動じゃない。音遠の模倣だよ」
「音遠ちゃんの……模倣……」
「こいつはこいつ。芽衣ちゃんは芽衣ちゃん。『十人十色』って言うでしょ？　人間なんて一人一人違うんだから、異性との接し方も一人一人違うってこった」
彼の説得は、いよいよ佳境に入っていた。語り口調も、さながら舞台俳優の如きものになっていた。
「何もこいつの真似しなくたって、芽衣ちゃんは芽衣ちゃんなりに、シュウや俺とかと接していけばいいんだよ。自分に嘘つくのって、苦しいからな……」
最後は何故か視線を逸らしながら、話を切る灯夜。芽衣たちは彼の話を興味深そうに聞いていた。
「う～ん……。ボクにはボクなりのやり方がある……かぁ。そうだよね、どう頑張っても、ボクは音遠ちゃんにはなれないんだからね

……。お兄ちゃん、ありがと！」
「まぁ、また何かあったら遠慮なく俺に相談しなよ。あ、こいつに相談持ちかけるのはやめときな？　ぜーんぜん役に立たないからね。実際さっきも……」
「むうう！　私だって役に立てるもーん！　もーん！！」
「はーいはい。口だけなら何とでも言えるわなぁ。はっははは！」
「……いぢわるぅ」
「あはははは！　もーホント面白いねぇ～！」
「まったくだ。いまどき珍しいねぇこんな双子は」
「……え？」
いつの間にか、彼らのテーブルのそばにマスターが立っていた。
「マスターいつの間に？　てゆーか、もうお客さん大丈夫なの？」
「ああ、ちょっとだけ落ち着いたかな……」
そう言うとマスターは、混みあった店内を見回した。確かに幾分落ち着いてはきているようだ。
「ん～、いつまでも呼びにこないから、僕のほうから注文取りに来たよ。で？　ご注文はお決まりですか？」
「あ、ボクはスパークリングティーでお願い！」
「私はレモンティーがいいなぁ」
「俺はホットコーヒーで。ブルーマウンテン、あります？」
「おっ？　豆の指定をしてきたか。ちょっと値が張るけどいいかな？」
「ええ、構いません」
「きゃう♪　お兄ちゃんカッコいい♪」
「オッケー。スパーク1つ、レモン1つ、ブルマン1つ入りまーす！」
「……あれぇ？　この店ってマスター1人しかいないよね？　誰に言ってるのぉ？」
「んー？　1人しかいないなら自分に言ってるってことになるねぇ」
「……ボク、これで3回目だよ。そのセリフ聞いたの」

「ん？　そうだっけ？　昔の事はもう忘れたよ。じゃ、今から作ってくるから、１２７秒ほど待っててくださいね、っと。ほいスタート！」
注文を受けたマスターは、何故か跳びはねるようにカウンター奥の厨房へと引き返した。
３人は唖然としながらも、彼の動向を見守っていた。

しばらくして、トレイに２つのグラスと１つのカップを乗せてマスターが現れた。
「お待たせいたしました。スパークリングティーにレモンティー、そしてブルーマウンテンのホットです。ごゆっくりどうぞ」
使い慣れた言い回しを終えて一礼した後、マスターはエプロンのポケットから、何故か入っていたストップウォッチを取り出してボタンを押した。
高速で刻まれた時が止まる。それのデジタル表示を、真剣な面持ちで凝視するマスター。
「２分０９秒６１……か。くっ、２秒とちょっと遅かったか……。あそこでコップの入れ替えをもっとスムーズにやってれば……」
ややうなだれながらマスターが戻っていく。宣言した時間内に任務を遂行できなかった事がよほどショックだったのだろうか。

会計を済ませた３人は、未だにうなだれているマスターを横目に店を出た。
カフェを出た直後に吹いた、潮の香りを含んだ風が彼らの気分を晴れやかなものにする。
「……くぁ～！　気持ちいい！　やっぱこの街はいいな、海も近いし！」
「ホントだよねー。ボク、ここに来てよかったなぁ」
「私たちはね、生まれてからずーっとこの街で暮らしてるんだ！

他のところに行きたいって思った事はないよね、お兄ちゃん？」
「ああ……。大学も近いし、結構都会だしな。芽衣ちゃんがここ選んだのは正解だよ」
「うん！　……あ、そうそう。今日ってさ……、暇かな？」
ふと、芽衣が思い出したように2人に尋ねる。
「え？　私は暇だけど……お兄ちゃんは？」
「俺もこれといって予定はないな。どうかしたの？」
突然の芽衣の質問に困惑する灯夜。しかし彼女はさらっとこう言ってのけた。
「ボクの家に来てほしいんだぁ。ご飯一緒に食べようかなって思って……。もしよければ泊まってってもいいよ？　あ、ご飯はボクが作るから」
「お泊り？　わーいわーい♪　芽衣ちゃんと寝れるんだー♪　芽衣ちゃんのご飯も楽しみだにゃあ……」
「ちょちょ、ちょい待ち！　メシ食いに行くのはいいとしても、男の俺を泊まらせてもいいのか？　音遠だけならまだしも……」
当然の反応である。ひとり暮らしの女性の家に男が出向くだけでも誤解を招きかねないのに、泊まるとあっては更なる誤解が生じる。それを恐れた彼は慌てに慌ててしまった。
「えー、別にいいよぉ。お兄ちゃんならえっちぃ事しなさそうだし。ねー音遠ちゃん？」
「うん！　……でもちゅーはするよぉ？　昨日もしちゃった♪」
「ばっ、バカヤロ……」
「……お兄ちゃん、本当なの？」
「……はい、その通りです……。はぁ、いいのかなぁ俺、こんな事続けてても……」
「えっと……ボクはいいと思うよー？　いいお兄ちゃんじゃない！　自信持ちなよ。ね？」
「ありがとよぉ……。じゃ、俺もお泊りオッケー？」
「うん、オッケーだよ！　あ……、親御さんにはちゃんと連絡しな

いとダメだぞー？」
「わかってるって。あとでちゃんとするよ。ま、『ダチの家に泊まることになった。音遠は芽衣ちゃんの家に泊まるってさ』みたいに言っておけばいいか」

程なくして3人は、芽衣の家に到着した。
女の子が一人で住むには少々広いような印象を受けるその部屋には、細部にまで装飾が及んでおり、彼女の意外な一面が垣間見えた。
「うわ～、かわいいお部屋だね～！」
「ありがとっ。……でも男の子にはちょっと……どうかな？」
「え？　いや、いいんじゃない？　ちゃんと片付いてるし。それに引き換え、どっかの誰かさんの部屋なんかすっげぇよ？　アレだ、足の踏み場もないってやつだ」
「あー！　お兄ちゃん私のお部屋に入ったなー？」
「おやぁ？　俺、個人名出したっけ？　それなのに、なーんで音遠ちゃんが怒るのかなー？」
「……いぢわるぅ」
「もー、いぢめないの！　……あ、今からご飯作るから、ちょっと待っててね」
「あ、ホント悪いねー。何か手伝おうか？」
「いいのよー。お客さんなんだからぁ、テレビでも見ててよ」
立ち上がってテレビをつけると、彼女はそのままキッチンの方へと行ってしまった。

トントントントン……
包丁とまな板が当たる音が小気味良いリズムを刻む。これだけでも、彼女がいかに料理に慣れているかを知ることができる。
音遠は、そんな芽衣を羨望の眼差しで見つめていた。
「いいなぁ芽衣ちゃん……。私もお料理上手になりたいなぁ……」
彼女はふと思いつき、傍らでテレビの野球中継を見ている兄に話

しかけた。
「あ……あのさ……お兄ちゃん……？」
「あ？　何だよ？　今満墨でいいとこなのに……」
「お兄ちゃん……。私が作ったお料理、今度食べてくれる？」
「え？　お前の？　何もお前がやらなくとも、母さんがいるだろ？」
「ちーがーうー！　私が、お兄ちゃんに作ってあげたいなの……」
「……あ、そう言やお前の手料理って食ったことねぇな。……ま、その、なんだ。どうしてもやりたいってんなら、母さんがいないときにでもお願いするかな」
「ホントー？　ありがとー！　お兄ちゃーん大好きー♪　きゃううー♪」
「がっぁはぁ……。ってかここ、人ん家だぞ？」
「いーのいーの！　はぐ♪」
兄の首すじに顔をうずめながらはしゃぐ音遠。そこに、調理を終えた芽衣が現れた。
「お待っと……って、ボクおじゃまかな？」
彼らから視線を外しながら、テーブルに食器類を並べる芽衣。
「だああ、離れやがれってんだこのミラクルバカ！　芽衣ちゃんが困ってんだろーが！　俺に抱きつく暇があったら、芽衣ちゃんの手伝いしてきやがれ！」
半ば強引に妹を引き離す灯夜。しかしその顔はほのかに紅潮していた。どうしても照れを隠せないらしい。
「あうう、もうちょっとあのままがよかったぅ……」

数分後、テーブル狭しと料理が並べられた。
「うわ～、すごいね～！」
「そうかなー？　ありあわせのしか使ってないよー？」
「じゃあもっと凄いわ。ってか早く食おうぜ！　俺腹減っちまったよぉ」
「はいはい。それでは、いただきます！」

「いただきまーす！」
「……いただきます」
彼らは、手作りの温もりがこもった料理の数々を堪能した。
「うっ……うーまーいーぞぉぉぉぉ！！！　て、ていうかさ、よく人数分あったね食器とか。事前に用意してたとか？」
「……うん」
「すっごくおいしい～！　いいなぁ、こんなおいしいのが毎日食べられて」
「……そうでもないよ」
何やら芽衣の態度がだんだんと素っ気ないものへと変わっていった。
灯夜は、そんな彼女の様子を見逃さなかったが、敢えて口には出さなかった。
と、その時。芽衣が不意に口を開いた。
「……あのね2人とも？　食べながらでいいから聞いてくれるかな？」
箸を置き、幾分声のトーンを落としてそう尋ねる芽衣。その様子を不思議に思ったか、2人は顔を見合わせたがすぐに音遠がこう返す。
「えっと……シュウくんのこと、かな？　いいよ……」
「うん……」
彼女は一呼吸おいて、淡々と語り始める。
「こないだ、シュウくんをカフェに誘ったの。それで意外な一面がわかったんだ……」
「意外な一面、って？」
「シュウくんって、甘いのが好きなんだよ。だから……、今度シュウくんに何かお菓子作ってあげようかな……って……」
「……」
無言のまま数回うなずく2人。芽衣はさらに続ける。
「その帰りね、シュウくんの自転車に乗せてもらったの。すっごく

速くて、気持ちよかったんだ……」
「あぁ、あいつって確かチャリ通してたっけか」
「うん。それも、ボクが『乗せて』って頼んだんじゃなくて、シュウくんの方から『乗るか？』って言ってくれたの」
「へぇ、あいつがねぇ……。最近天気悪いのはそのせいだな」
「だからさ……、本当のシュウくんはすっごく優しくて、強くて、でも子供っぽくて……。ボクは……そんなシュウくんが……」
そこで不意に言葉を切る芽衣。見ると、小さな肩を震わせているようであった。
灯夜は、そんな彼女に静かに触れる。
「大丈夫。言っちゃいなよ、その先。気持ちに嘘がないなら、言っちゃった方がいいぜ？」
音遠もそれに続くかのように、彼女を優しく抱きしめながら囁く。
「芽衣ちゃん、がんばって……ね？」
２人の気遣いが彼女の胸を打つ。
話を進めていくうちにこみ上げてきた、瞳の奥の熱いものは、ついに抑えがきかないところまで膨れ上がっていた。
それから数秒もしないうちに、芽衣は音遠の胸の中で泣き崩れた。
「ありがとう、ありがとう！　２人とも……大好き！！　うっ、うっ……」
芽衣を抱く腕に、さらに力を込める音遠。彼女の精一杯の力で、強く、強く抱きしめる。
子供のように泣きつづける芽衣を横目に、灯夜もまた涙をこらえていた。

「くすん……もう落ち着いたよ。音遠ちゃん、ありがと」
ひとしきり泣きはらした彼女が言う。赤くなったまぶたを隠すこともせずに。
「ボクはシュウくんのこと……好き。Ｌｉｋｅじゃなくて……Ｌｏｖｅ。この気持ちに嘘はないよ……」

彼女は全てを明らかにした。今までにもそれをほのめかすような素振りは見せていたが、口に出したのはこれが初めてであった。
「やっと本当の言葉が聞けたよ。まぁ俺は気付いてたけどさ」
「やっぱり……誰かを好きになるって事はすごく勇気がいるんだね……」
「そうだね。でも2人の場合はちょっと違うよー。本当の兄妹なんでしょ？」
「そう……なんだけどなぁ、俺も最近、そんな風に思えなくなってきたよ。何だかんだ言っても俺、こいつの事好きなんだよな。まぁでも、本当の妹なわけだから、いつかは……な」
自分のあごに手をやりながら小さく呟いた兄に対し、音遠は静かに寄り添いながらこう言った。
「その『いつか』が来るまで……一緒にいてね？」
「ああ……わかってるよ。約束したもんな」
「嬉しい……。大好き♪」
最愛の存在である兄、灯夜に最大の愛を振りまく音遠。
まるで本当の恋人同士のようにふるまう2人を見ていた芽衣は、体じゅうが熱くなってくるような錯覚を覚えた。
（ホントに仲いいなぁ……。ボクもシュウくんとあれくらい仲良くしたいなぁ……って、うわーうわー！　想像しちゃったー！　うわわぁ～！）
芽衣は2人の姿に自分らを置き換えた事で恥ずかしくなってしまい、思わず顔を赤らめてしまった。
「あ、あーそうだ！　そろそろ片づけちゃうね」
照れ隠しのつもりだろうか、彼女は普段からよく通る声をさらに大きく張り上げていた。
その声に驚きの表情を浮かべている2人がそこにいた。
彼らは申し訳なさそうに、芽衣の後に続いて食器を下げに行く。
「あーありがとねー。ねぇ音遠ちゃん？　洗いもの終わったら一緒にお風呂入ろ？」

「うん！　いいよー！」
「いや、ホント悪いねー。何から何までおんぶにだっこで……」
「気にしないでよー。お兄ちゃんはボクたちのあとでね？」
「言われなくても分かってますって。あ、テレビ見てていい？」
「いいよ？　野球見たいんでしょー？」
「へへっ、まあね」
そう言うと灯夜は、足早にリビングへ行きテレビのスイッチを入れた。そして、テレビの正面に座り込んでしまった。
（男の子って、何か一つは好きなことあるんだなぁ……。シュウくんは自転車……。女の子のボクにも……何かあるのかな？）
テレビをかじりつくように見る彼の姿を見ながら、芽衣は考えを巡らせていた。その時……。
「……っか～！　マジかよちくしょーめ！　０対１３って何だよ、縁起わっりーな。完封だし……っつーか、さっきの満塁で０点とか勘弁してくれよ……」
リビングから、何やら不穏な声が聞こえてきた。その声は、なおも続く。
その声の主は灯夜であった。どうやらすでに試合は終わっていたようだ。彼にとっては残念な結果で。
芽衣は苦笑しながら彼に言う。
「お兄ちゃ～ん、それじゃただのオジサンだよ～？」
「……ワリ。人ん家ってことすっかり忘れてた」

その夜……灯夜はリビングで寝る事を強く希望した。
恋人同士でもない女の子と同じ部屋で寝るという事が、彼自身許せないようだ。
そのため女性２人は、芽衣のベッドを使う事になった。
芽衣のベッドはシングルサイズではあるが、一緒に寝る音遠はかなり小柄な女の子なので特に気になる狭さでもなかったようだ。
傍らの少女が安らかな寝息をたてている隣で、芽衣はどうしても

眠れなかった。
シュウと自分がふたりきりでいる場面を想像しているのか、彼女の胸は激しく波打っていた。
「むにぃ～眠れないよぉ～……」
そんな中でも、彼女はある一つの決意を固めていた……。
（次の月曜日……告白しよう。ボクのこの気持ちをシュウくんに……）

それは翌週の月曜日のことだった。
どうやら、ついに梅雨の季節に差し掛かったらしく、昨日から降り始めた雨は、止む事無く今もなお降り続いてた。
この日の講義が全て終わったあと、芽衣は意を決して周一の携帯に電話を入れた。しかし……。
「あっちゃ～、電源切ってるのかな？」
応答はなかった。芽衣と周一は学部が違うため、終わる時間がいつも同じとは限らない。
途方にくれた彼女は、雨を避ける為に校内に戻った。
1分……1秒……。
時間が経過していくうちに、それは少しずつ大きくなっていく。
彼女は再び携帯を手に取った。今度はメールを送る事にしたようだ。
文面は『掲示板のところで待ってるからね……』と、ただ用件のみを伝える内容でしかなかった。
送信が終わった後、彼女は再び待ち続けた。彼女にとっては永遠とも思える時間を。

それから何分が過ぎただろうか、芽衣は立ち上がり、雨の降る外へと向かった。
その胸の鼓動は、とどまるところを知らない。

極度の緊張に押しつぶされそうになりながらも、彼女は一歩一歩前へと進んでいった。
そして、再び永遠とも思える時間を待ち続けた。
その時……雨の中から見覚えのある姿が見えた。
間違いなく、周一本人であった。
「……」
「……」
嫌な沈黙が続いた……が、その均衡を周一が破った。
「なぁ、何か俺に用でもあるのか？　電話もしてきたみたいだし……」
芽衣のただならぬ様子を少なからず察したか、周一は幾分穏やかな口調で聞いた。
「うん……。ゴメンね、こんな雨の日に呼び出しちゃって……」
「いや、それは気にしてねぇよ。だから、用は何だっての」
「ちょっとね……。シュウくんにどうしても伝えたい事があって……」
「伝えたい事？」
「うん。すごく、大切な事」
「……何だよ。言いたい事があるなら言えよ」
「え……えっと……。ボクね……」
「……」
「シュウくんのことが……好き……」

第5章：Solution

「ボク……シュウくんのことが……好き……」
「えっ……？」
「……ごめんね、いきなりこんな事言っちゃって。でも、ボクのこの気持ちは嘘じゃないよ。ボクはシュウくんが好きなの……」
「芽衣……」
傘を握る手に力がこもる。
周一は、彼女の突然の告白に気が動転していた。
（俺の事が……好きだと……？　どういう事だ……？）
芽衣は、周一の目を真っ直ぐ見据えながら彼の返答を待った。
しかし……。
「……すまん、ちょっと今日はこの後用事が入ってるから……帰らせてくれ」
そう言いながらきびすを返す周一。そして、近くに停めてあった自転車に乗り込んでしまった。
「シュウくん！　待って……！」
芽衣の声は……届いていなかった。
声をかけたと同時に、周一の自転車は彼を乗せて高速で走り抜けていってしまったのだ。
一人取り残された芽衣に、容赦なく降り続く雨。
彼女の心の中にも、大雨が降っている事であろう。

その頃の周一は、大雨の中を自転車で駆け抜けていた。
（俺はなんて事をしてしまったんだ……！　今日は予定なんか入ってないのに……！）
思索を巡らせながらも、ペダルをこぐ足にさらに力を入れる。
自分のやってしまった事を振り払うかのように。

家に戻った周一は改めて、芽衣からの告白を落ち着いて考えた。
「芽衣が俺のこと……好きだと？　なんでだ？　なんで……俺なんかを？　……まさか、あれか？」
彼はふと、先週土曜日の和也と圭輔との出来事を思い出した。
自分の性格を変えたいがために、皆が動いていたことは気づかされたが、まさか告白までされるとは予想していなかったのだ。
「俺は……どうすればいい……？」
途方に暮れた彼の手には携帯電話が握られていた。
「一人で考えてても仕方ないな……。ここはとりあえず圭輔の奴に相談してみるか……」
彼は圭輔に電話を入れた。
応答は、程なくして返ってきた。
「もしもし、シュウか？　どうした？」
「ああ……。ちょっとな……」
周一は圭輔に、芽衣から告白されたことを告げた。
同時に、その返事をまだしていないことも。

「……っかぁ～！　お前はバカか？　何で逃げたりしたんだよ？ったく、翔司やミネタク以上のバカだなお前は……」
「誰だよそいつら……。いや、それはどうでもいい。ともかく……あの時はどうすればいいかわからなかったんだよ」
「いーや違うね。その場からすぐ逃げたかったんだろ」
「……」
「その沈黙、イエスと取るぜ。……まずお前は、もっと芽衣ちゃんの気持ちを考えてやるべきだ。彼女が望んでたのは、お前の明確な意思表示なんだよ」
「明確な……意思表示だと？」
「そう。好きなら好き、そうでないならそうでないって事を、はっきり言ってほしかったんだよ」
「そう……だったのか？」

「恐らくは、な。でもな？　これだけは言っておく。……今の芽衣ちゃんには、お前のことしか見えていない」
「そうなのか……？」
「オレからはそれしか言えねぇ。あとは本人に直接聞きな。あと、ちゃんとお前自身の答えを用意しておくんだぞ。……あんな純情な娘を泣かしたりしたら、オレはお前を許さない」
「わかったよ。いきなりすまなかったな」
「いーよそのくらい。んじゃま、健闘を祈る！」
言い終わると同時に通話を切る圭輔。
周一は、親友の助言を頭の中で反芻していた。
「そうだ……。俺は逃げた。あの沈黙に耐えられなくなって……はっきりとした返事もせずに逃げた。……ここはやっぱり、改めてあいつに答えてやるのが筋なんだろうが……」
そう言いながら、力なくベッドへと倒れこんだ周一。枕に顔をうずめ、視界を遮る。
（ちっくしょう……。わかんねぇよ……。俺は芽衣のことが……好きなのか？　それとも……。あーちくしょー、わかんねぇ！）

次に彼が気づいた時には、すでに太陽が顔を出していた。
「何だ……。あのまま寝ちまったのか。全然寝た気しねぇけど……」
ふらふらと立ち上がり、机の上に無造作に置かれていた携帯電話を手に取る周一。
そのディスプレイを覗き込んでみると、メールを着信しているようだ。
「1件来てるみたいだな……。誰だ？」
そのメールの送信主は芽衣であった。その文面は一言『待ってるからね』と。
「待ってる……だと？　何をだ？」
彼女は何を『待ってる』のだろうか？　と、周一は考えた。
いろいろと候補は挙がるのだが、この時の彼には答えが出せなか

った。

身支度を整えた周一は自転車に乗り込み、いつもの通学路を風を切って走り始めた。

しかし、どうにもペダルをこぐ足に力が入らない。まるで自分の足ではないような錯覚を感じた。

走っていれば、少しは心の中の靄から逃れられるかと思っていたが、それはただの思い違いでしかなかった。

「くそ……ダメだ今日は。学校行く気しねぇ。サボっちまえ。１回くらい別にいいや」

彼はそう言うと自転車を停め、向きを１８０度変えた……と同時にこう考えた。

「待てよ……。これじゃ結局逃げてるじゃねぇか。学校行かなきゃ芽衣には会えない。だからって今日は行く気しねぇし……。はぁ、どうすりゃいいんだよ」

彼は頭を抱え、その場に座り込むように考えた。現在の自分に出来る、最善の解決法を探した。……そして、一つの結論に達した。

「……カフェに行こう。ここはひとつ、大人の意見を参考にするしかない」

周一は再び向きを１８０度変え、行き先をカフェに改めて走り始めた。

数分後、周一は落ち着いたたたずまいを誇るカフェの前にいた。まだ午前中ということもあってか、店内に客は数人しかいないようだ。

彼が店のドアを開けると、同時に穏やかな声がかかる。

「いらっしゃい。お？　周一くんじゃないの。今日は大学どうしたんだい？」

「いや、ちょっと……今日は行く気が起こらなくて」

「ふむ。そういう日もあるよね。ま、ごゆっくりどうぞ」

マスターはホットコーヒーの入った容器の取っ手部分を持っている。その芳醇な香りが周一の鼻孔をくすぐった。
「……どうしちゃったのかな？　そんな仏頂面しちゃって。何か考え事でも？」
相変わらずの、全てを見透かしているかのような調子で話しかけるマスター。
周一は始めからそれが目的でここに来たので、包み隠さず打ち明けた。

「……はいはい、わかりました。芽衣ちゃんといいキミといい、ホント初々しいねぇ」
「で、俺はどうすればいいんですか」
「どうすりゃいいって、そんなの自分で言うより仕方ないでしょうが」
「……」
「もうさ、自分の中でもある程度は答えできてるんじゃないのかな？」
「……そうかもしれない」
「だろ？　じゃそれを言えばいいじゃないの。何で返事もせずにその場から立ち去ったりするのかね」
「……圭輔と同じような事言うんですね」
「あ、そうだった？　でもさ、誰だって同じようなこと言うと思うよ。話しかけられたら返事をする。これ常識。好きとかそういう以前の問題だね」
「いや、それと同じにするのは違うでしょ？」
「違わないよ。ん～だからね、頭の固いキミにもわかりやすく言うとだね、今回の件は『何か用事ある？』って聞かれた時に『ある』とか『ない』とか答えるのと同じなわけだ」
「その『質問』に対する『回答』としての意味で？」
「そういうこと。だから今回の場合は、『好き』か『嫌い』のどっ

ちかだね。嫌いって言っちゃうと語弊があるかもしれないけど。ま、2つに1つだから簡単でしょ？」
「簡単なんかじゃ……ない。あいつの気持ちも察してやらないと……。あいつがどんな気持ちで俺に告白したかってのを……」
「え、じゃあ何？　キミは自分の気持ちに反した答えを出すわけ？　嘘偽りの答えを出すなら、そっちの方が余計に彼女の気持ちを考えてないと思うけど、どうなの？」
「……」
「芽衣ちゃんはね、キミの『素直な気持ち』を知りたいんだよ。彼女も自分の素直な気持ちをキミに打ち明けた。それだけで彼女は満足してると思う」
「そう……だったのか……？」
「だからもし、キミからの返事が……何だ、その『嫌い』みたいなやつであったとしても、後悔はしないはずだよ」
「だけど……！　それじゃ芽衣のやつ、落ち込んじまうんじゃ……」
「この期に及んでなんだその態度は。……彼女にとっては、結果なんてどうでもいいんだよ。とりあえず『告白する』っていうミッションはこなしたわけだし」
「……」
「それに、あの娘意外とさっぱりしてるから、嫌いだって言われても2～3日凹むくらいで、すぐにいつもの調子に戻るだろうよ」
マスターは、まだ何も分からない子供に対するような口調で話を続けた。
周一は反論できないので、ただただ頷く事しか出来なかった。
その時……マスターは、突如思いついたかのように周一に尋ねてみた。
「ん～もしかして、キミは芽衣ちゃんを傷つけるのが怖いとか思ってないかな？」
「傷つけるのが……怖い……？」
「うん。自分の中で答えをとっくに出せてるのに、それを言わない

って事はそうとしか考えられない。キミの言葉で彼女を傷つけるのが許せないのかどうかはわからないがね」
「そうだ……。俺は圭輔たちに気付かされた。俺の振る舞いがすでに芽衣を傷つけていた事を……。だから今度も、言葉で傷つけてしまうかも知れないから、俺は言えなかったんだ」
「やっぱりね。あの娘も以前、キミのことについて僕に相談しにきたんだよね。みんな動いてた。キミの性格を変えるために」
「……」
「でも、キミは変わったよ。最初に見た時とか芽衣ちゃんの話を聞く限りでは、他人の事なんか全く考えちゃいない最低な奴だと思ったくらいだ」
「そう……だったんですか」
「でも、今は違う。ちゃんと芽衣ちゃんの気持ちを考えられてるし」
「……そういう意味では、俺は変わったんだな。自分ではそんなつもりはないんですけどね」
「まぁいいじゃん。結果的に、それがいい方向に傾いたわけなんだし。んで？　どうするのキミは？　このまま学校サボったら、いつまでも逃げてる事になるが、それでいいのか？」
「……わかりました。俺が間違ってました。今から俺の答えを……あいつに伝えてきます……」
「そうか……よく言った。行くなら今だ、決心の鈍らないうちに行ってくるんだ！」
マスターは、いよいよ決心を固めた周一に最後の助言をした。
……しかし、その直後コーヒーをなみなみと注いだカップを彼に差し出してこう言った。
「っとその前に、せっかく来たのに話だけして帰るのもアレだし、気分を落ち着かせる意味も込めて、コーヒーでも飲んでかない？
１００円でいいよ」
「しっかりしてますね」
「こっちは商売ですから。割り引いただけでもありがたく思って欲

しいな」
「なんだそりゃ……」
「ま、ごゆっくり。僕はあっちのお客さんにコーヒーのおかわり勧めてくるから」
「ホント、よく1人でがんばれるよな……」
周一は、マスターの淹れてくれたコーヒーに何も入れず飲んでみた。
「うわ、苦っ。でも、嫌な苦味じゃない……？　本当にうまいコーヒーって、こんな味なのか……」

コーヒーを飲み終えた周一は、カウンターに１００円を置いて店を出た。
その双眸からは、決意がにじみ出ているかのようだ。
終始無言のまま、自転車をこぎ始める。
先刻までの、言いようのない焦燥感を払拭するかのように、力強くペダルをこいでゆく。
今の彼を止められるものは、何もなかった。

彼が自転車に乗っていた時間はほんのわずかの間。あっという間に学校に着いてしまった。
現在時刻は、すでに正午を過ぎている。
周一はまず、学食へと向かった。この時間帯ならば、誰かしらがいると踏んだからだ。
しかし、何故かこの日は芽衣たちの姿を確認する事は出来なかった。
「くそっ！　何で今日に限っていねぇんだよ」
吐き捨てるように言いながら学食での捜索を打ち切った周一は、芽衣の携帯にワン切りを仕掛けた。
「よし、これでいい……。あとは芽衣からの連絡待ちだ。さて……それまで何してようかな……？」

傍らのベンチに腰をかけて、昂ぶった気持ちを落ち着かせる。
すると、先程まで全く浮かんでこなかった考えが次々と浮かんできた。
「あ……考えてみりゃ、学校に行くだけならそんな苦でもなかったわけだな。講義をサボればいいだけの事。何だよ、初めっから学校だけは行っときゃよかった」
腰を下ろしたのはほんの１０数秒だったが、彼は立ち上がった。
「……気晴らしに海の方にでも行ってみようかな」
ここ西牧田は海が近く、夕方にもなると潮の香りが風に乗って運ばれてくるのだ。
彼は自転車に乗ってその風を一身に受けることを、帰り道の密かな楽しみにしていた。

学校から自転車で１０分ほど進んだところに、海の見える広場がある。
防波壁があるので海岸には出る事が出来ないが、水平線を臨む眺めは、コンクリートジャングルに慣れた人間の荒みきった心を浄化するかのようだ。
周一は、誰に言われるでもなくここにやってきていた。本能がそうさせたのだろうか。
彼はそこで、遠くの水平線を見つめ始めた。そこらのベンチに腰を落ち着け、いつまでも。

それからどのくらい経過しただろうか、マナーモードにしていた彼の携帯がポケットの中で振動を始める。
どうやら待ち人……芽衣からの電話らしい。
「芽衣か……どうした？」
「さっき……電話くれたよね？　ゴメンね、授業中だったからすぐ出らんなかった」
「いいよそんな事。それよりさ……お前に言わなきゃならない事が

ある」
「……何？」
「俺の……答えだ。今からそっちに行くから……待っててくれ」
「え？　今学校にいないの？　何処に……いるの？」
「ああ、ちょっとな。海を見てたんだよ……。１０分くらいでそっちに着ける」
「……ボクも海見たいよ。ボクがそっちに行く！」
「いや、いいって……。歩きだろ？　何分かかるかわかったもんじゃねぇ」
「……でも、見たいんだもん……。むにぃ」
「わかった、こうしよう。俺がお前を迎えにいく。だからやっぱお前はそこで待ってろ」
「……うん。待ってるからね……」
その言葉を最後に、彼女は通話を切った。
「さて……行くか」
呼吸を整えつつ、彼は再び自転車を走らせた。

１０分後、周一は再び学校に姿を現した。
芽衣は掲示板のところに立っていたので、見つけることは容易だった。
「待たせたな。じゃ、行こうか？」
「……うん」
「そんじゃ後ろに乗れ。しっかりつかまってろよ」
「あ……あのさ……」
「ん？　どうした？」
「その……。ゆっくり走ってほしいなぁ……なんて」
「ゆっくり行きたいのか？　安全運転しろっての？」
「あ、シュウくんが急ぎたいならいいよぉ……」
「わかったわかった。やっぱ２人乗りはあぶねーしな。ゆっくり行こうか」

「あ、いいのー？　ありがとー！　ゴメンねわがまま言っちゃって……」
「いいっていいって。そんな事でいちいち感謝されるのって、めんどくせぇ」
「う～……。じゃあ乗るね。いっくぞー！　れっつごー！」
「お前、子供か……？」

２人を乗せた自転車は、人が歩くのとほとんど変わらない速度でゆっくりと進んでいた。
その間の芽衣は、横向きに座りながら必要以上に周一にしがみついていた。
（ずっと……このままがいいな……。いつまでも……シュウくんを感じていたいよ……）
知らず知らずのうちに、周一にしがみつく腕に力が入る。
その間も彼女の体温の上昇はとどまるところを知らない。
下手をすれば、周一にもその体温が伝わってしまいそうでもあった。
（あっつ……。さっきまで吹いてた海風はすっげぇ涼しかったのに……。寒いとも感じてたのに、何でだ？）
暑さの原因が後ろに座っている芽衣にある事に気付かないまま、周一は自転車をゆっくりと、ゆっくりとこぎ続けた。

そして３０分後、彼らは再び海を臨む広場に到着した。
もっとも、芽衣はこの場所に足を踏み入れた事はないのだが。
「……とりあえず、どっかその辺に座るか？」
周一はごくごく自然に尋ねたつもりだった。しかし芽衣はひどく緊張しているようだった。
「ふえっ！？　あ、うん。そ、そうだね。座ろっか。あはは……」
とっさに体裁を繕ったつもりの芽衣ではあったが、緊張のあまり声が上ずってしまったのは隠せなかった。

「……」
「……」
ベンチに隣り合って座る2人を包み込む、あの時と同じような嫌な沈黙。
1分経っても、5分経ってもお互いに口を開こうとはしない。
その沈黙のさなか、芽衣はさりげなく周一の手に自分の手を差し伸べた。
それらが触れ合った時、周一は横目で芽衣の方を見たが、彼女の視線は何故か正反対のところにあった。
海の方向とも違い、ぐずついた曇り空を見ていた。
ほんの少しのきっかけで、すぐにも雨が降ってきそうな空を。

芽衣の手からの温もりが、周一にも伝わってくる。
その感触で言いようのない高揚感に包まれた彼は、ついに沈黙を打ち破った。
「……こないだは悪かった。あんな形で終わらせちまって」
「もういいよぉ、そんな事……。ボクの方こそ、言うだけでゴメンね……。まだその先のこと言いきってないし……」
「その先のことって？」
「好きってしか言ってないでしょ？　その先……」
「……付き合え、って事？」
「むにぃ、先に言わないでよぉ……。でも、それだよ。好きだから……シュウくんの事が大好きだから……ボクと付き合って欲しいの。……ダメかな？」
「……」
またも起こる沈黙。芽衣は周一の目を真っ直ぐ見据え、彼の返答を待つ。
（ここで言わなきゃ……男じゃない。言いにくい事だからこそ、結論から言うべきだしな……）

「芽衣……ありがとな」
「えっ……？」
「俺にそう言うの、すっげぇ勇気使ったろ？　……そんなお前の気持ちを考えもせず俺は逃げた。本当に悪い事をしちまった……」
「シュウくん……」
「いろいろな人に相談したんだけど、結局みんな最後は同じ事しか言わないんだよな。『自分の気持ちに素直になれ』って……さ」
「そう……だったんだ」
「お前の気持ちを考えつつ、俺の素直な気持ちを伝えられたら一番いいんだろうが、そうそううまくいくもんじゃないんだよな」
「うん……」
「俺も……嬉しかった。女の子から告白された経験なんてなかったし。だからこそ悩んだ。俺でいいのかとか、仮に俺でよかったとしても、お前を満足させてやれるのか……とか」
　周一がそこまで言い終えたところで、大粒の雨が降り始めた。
　しかし彼はそれに気づく事もなく、淡々と話を続けた。
「でも、そんな事はどうだってよかったんだよな。お前は、俺自身がお前のことをどう思ってるか知りたかったんだよな」
「……うん」
「それに気付いてやれなかったのも悪かった。気付いてれば、お互いにこんなに悩む必要もなかったわけだし」
「……」
「遅くなっちまったけど、俺の素直な気持ちを言うからな。ちゃんと聞いててくれよ」
「うん……！」
　周一は呼吸を整えた。芽衣もそんな彼の姿を見て、息を飲んだ。
　そして……。

「俺は、芽衣のことが好きだ」

先刻より降り始めた雨は、次第に雨脚を強めながら2人を打ちつける。
だが彼らは、傘も差そうともせずに向かい合っていた。
2人の距離は少しずつ、だが確実に縮まってゆく。
芽衣の腕が周一に触れる。そして、彼の背中に腕を回す。
彼女は、ようやくここまでたどり着けた事に感極まって、大きな瞳に涙を浮かべていた。
（やっとつかまえた……。もう絶対に離さないんだから……！）
その時、彼女の紅潮しきった頬を伝うものを周一は確認した。
降り続く雨か、はたまた彼女の涙なのかは分からなかった。
それを指先で拭った後、周一は無言で彼女を抱き返す。
2人は今、ついにひとつになったのだ。

降りしきる雨の中、2人はいつまでも互いを感じあっていた。
（芽衣……これでよかったんだろ……？）
（シュウくん……。ボク、すっごく幸せだよ……。大好き……。絶対離さないから、シュウくんもボクを離さないでね……）

いつのまにか雨も止み、辺りは夕焼け色に染まっている。
あと1時間ほどで眼前に広がる大海原に吸い込まれてゆきそうな太陽は、最後のあがきとばかりに赤々と燃えている。
「ありがとうな芽衣……。こんな俺を好きになってくれて」
「ううん、そうじゃないの。そんなシュウくんだから、ボクは大好きになったんだよ？」
「……」
「……えいっ！」
夕焼け色に染まる周一の頬に、芽衣は小さく口づけをした。
突然の事に激しく動揺した周一は、声を震わせながら言った。

「な、何すんだよいきなり！」
「えへへー。だって好きなんだもーん。ボクのファーストキスは、これでシュウくんのものだね☆」
「こ、この野郎……。そんな事されたら、俺もそうするしかねーじゃねーか、めんどくせー」
「……してくれるの？」
そう言いながら、芽衣は静かに目を閉じた。全てを彼に委ねるかのように。
彼は芽衣を引き寄せ、そして、くちびるを重ね合わせる。
（あっ……）
周一の行動に驚いた芽衣は、大きく目を見開いた。そこには、恥ずかしげに彼女とくちびるを重ね合わせる周一の姿があった。
芽衣もまた、自分の体温が上昇していることを感じていた。
そのままの姿勢で、さらに互いの距離を縮めてゆく。
そしてそれが、限りなくゼロに近づいた時、彼は芽衣の胸に自分の手を持ってきた。
（あっ……、え……？　シュウくん……？）
さらに胸の鼓動を早める芽衣。何が起こったかわからず動揺してしまっている。
だが周一は、それ以上腕を動かそうとはせず、芽衣の心臓の辺りに手を置いている。
（シュウくん……どうしたの……？　はぅ……ん……）
声に出そうとしたが、口がふさがっていた為にそれは出来なかった。
その後、納得したように腕を離した周一は、直後に密着状態だった身体も離しながらこう言った。
「……すげー動いてたな、お前の心臓。そんなにドキドキするようなものかぁ？」
「するよぉ……。ここ、触られちゃったと思ったじゃないかぁ」
ふくれっ面で周一に抗議をする芽衣ではあったが、悪意は全くな

いようだ。
「さすがに俺だってそこまではしねーよ。……ってか、あるのか？」
「ひ……ひっど～い！　ボクだってちっちゃいの気にしてるのにー！　も～！　シュウくんのばかばかー！」
顔を真っ赤にしながら周一をぽこぽこと叩く芽衣。
だが彼女はやや力が強いので、一発一発がそれなりの打撃となって周一を襲う。
「痛てーって！　ったく、かわいげがねーなぁお前は……」
「……むにぃ」

2人並んで、夕日が海に沈むのを見届けた後、周一がゆっくりと立ち上がって言う。
「……そろそろ帰るか？　家まで送るよ」
「あ、うん。……もしよければ、ボクんち泊まってく？」
「はぁ？　……そりゃダメだ。悪いから」
「大丈夫だよ。いつも1人だからちょっとだけ寂しいの。それに……彼氏を呼ぶのは自然でしょ？」
芽衣はこの時、初めて周一に向かって『彼氏』という言葉を口にした。
その言葉に動揺したか、ますます顔を紅潮させながら周一が言う。
「……いや、やっぱダメだ。そこまではさせられない」
「……わかったよぉ。じゃあ、今度は泊まってってね？　……約束してくれる？」
「ああ……今度な、今度。約束する」
「絶対だからね……。忘れちゃヤダよ……？」
「わかってるって。いいからさっさと帰ろうぜ。びしょ濡れだから早く風呂入りてーんだ」
「うん。……ゆっくり走ってね？　あと……いっしょにお風呂も入ろうね……」
「またかよ！　ったく注文が多いなぁ……って、えぇ！？」

この日は満月だった。夜空を彩る真円は、優しい光を放ちながら2人を包んでいる。
……そこに、怪しげな2つの人影が動いていた。
どうやら彼らは先程までの周一たちを、離れたところからずっと覗いていたらしい。
「撮ったな？」
「ああ、あのシーンをばっちりと！」
「よかったなぁ……シュウも芽衣ちゃんも。これで、相談に乗ってやったオレも報われるってもんだ」
「で、この撮ったのはどうすんだ？」
「決まってるだろう？　オレの友人連中に見せてやるんだよ」
「何でだよ？」
「……あいつはな、今回の事で散々オレらを巻き込んだ。でも、それも今こうして丸く収まったわけだから、それをいち早くみんなに伝えたいんだよ」
「そうか……。でもそれならメールだけでもよかったんじゃないか？」
「っか～、わかってねぇよ！　確かにメールだけでも『結果』だけは伝わるぞ？　でもな、みんなが求めてんのはそんなんじゃねぇんだ。その結果を裏付ける決定的な『証拠』なんだ」
「……そういうもんなのかねぇ」
「そういうもんなんだ！　友人の喜ばしい事は共有するのが本当の友情じゃないのか？　えぇ？　翔司くんよー！？」
「ははーっ、おっしゃる通りです圭輔様！　……んで？　今撮ったのをお前のケータイに送信すりゃいいんだな？」
「そうだ。それをオレが見せに行くって寸法だ」
「オッケー。んじゃ送るぜ！」
「よし来い！　……って、はぁ？　『添付ファイル削除』って何だよオイ！」

「えっ？　まさか送られてこなかったのか？」
「……機種が古いからか？　これカメラついてねーしなぁ、カメラで撮った画像は保存できないっぽいな」
「っか～、そんな天然記念物なケータイ、いい加減買い換えろや！　ったく、どーすんだよ？　それじゃ見せらんねーじゃんよ」
「むぅ……ちょっと待ってろ。考えっから。……そうだ！　翔司！　今日1日だけでいい、お前のケータイを貸してくれ！」
「あ、オレのケータイから直で見せるって事ね」
「ダメか？」
「いーよ1日くらいなら。どーせ誰からもメールとか来ねーしよ……」
「そんな寂しい事言うなよ～……。ま、いいや。すまんな、借りてくぞ」
「明日ちゃんと返せよ？　あと、万が一メールとか電話が来ても出るなよ？」
「わかってるって！　じゃー行ってくるぜー！」
「おう！　頑張って来いよ～……って、オレって何にも得るものがないような気がしてきた……」
　圭輔がその場を去ってから、残された翔司はようやく気づいてしまったようだ。
「全然知らない奴らがカップルになったのを見せ付けられて、その証明を写真に収めても、オレはそれをどーすりゃいいんだよ……？　はぁ、やっぱオレってヘタレなんだなぁ……」

　その頃、圭輔は夜道を自転車で駆け抜けていた。
　あまりにも距離が離れすぎている都萌の家までは行けなかったが、今回の件に関わった全ての友人の家を尋ねて回り、証拠と共に2人の辿り着いた場所を説明したのだ。
（よかった……本当によかった。オレは……自分の事のように嬉しいよ。シュウ、芽衣ちゃん、いつまでも仲良くやってってくれよな

……）
走りながらも、自然とそんな言葉を漏らしていた圭輔。
……しかし彼は、とある重大な事を忘れていたのだ。
（……はっ、これで独り者はオレと翔司だけになったか！　ちっくしょー！　アイツにだけは負けてらんねー！）
「うおあああああああーー！」
咆哮しながらさらにスピードをあげる圭輔であった。
その後……1人の若者がスピード違反を注意されて平謝りをしていたようだが、それが誰なのかは分からなかった。

翌日には、すでに全員に周一と芽衣が付き合い始めたことが伝わっていた。
周一は何故その事がこんなにも早く伝わっているか分からず戸惑いの表情を見せたが、傍らの彼女に言いくるめられてすぐに納得したようだ。
「ったく圭輔の奴、余計な事しやがって……」
「でもいいじゃーん。アンタらホント幸せそうよ。羨ましいわ」
「……うっせ。別にいいだろ？　こーなっちまったもんは。羨ましかったらお前もこうすりゃいいじゃねぇか。いい相手でも見つけてよぉ」
「何よそれ。ノロケ？」
「ばっ、バカなこと言うな！　俺がノロケてるだと！？　そんな事あるわけない！」
「顔赤いけど？　それはどう説明してくれるのかなー？」
「……暑いからだよ」
「言い訳うまいわねー。照れてるんでしょー？　正直に言っちゃいなさいよー！」
「あっ……う……、わかったよ。そうだよ、俺は……こいつが好きだよ」
「シュウくん……。ありがと。すっごく嬉しい」

「あー暑い暑い！　まったくここだけ温度が15℃は違うわね。とけちゃいそーよ。……はぁ～あ、アタシにはいつ春がくるのかしらねぇ～」
「大丈夫よー。みさきちゃんにもきっといい人見つかるって！」
「……ゴメン芽衣ちゃん、それ全然慰めになってないわ」
半ばやさぐれているかのようにも見えるが、本当はみさきも2人を心から祝福しているのだ。

長い、長い、音のない迷宮からも、ようやく一筋の旋律を確認した。
大切な、掛け替えのない音楽が流れていた。
それはいつまでも、2人の中で奏でられるデュエット。
ようやく辿り着いた長い旅路の終着点は、全てを優しく包み込む、母なる海。
2人は、新たなる始まりの音を、今静かに紡ぎ始めたのだ。

終章：Precious Melody

毎日のように続く３０℃以上の真夏日。たまに混ざる３５℃を超える猛暑日。

８月も半ばに差し掛かり、いよいよ夏本番といったところだろうか。

この時期になれば、多くの学生達は夏休みを満喫しており、彼らもまたそうであった。

彼らは、世界的にも有名なテーマパークの一つに数えられる『オーシャンズオリエント』に出かけていた。

だが、そこは毎日のように満員御礼が続いており、やはりこの日も見渡す限り黒山の人だかりであった。

「はぁ……。あっついし、人間アホみてーにいやがるし、ホントやってらんねぇな」

「そんな事言わないでよ～。みんなで遊びに来たんだから楽しもうよ、ね？」

「そだそだ！　ったく、いったいお前は何がそんな気に入らないんだ？　気のおけない仲間と出かけて、時間が過ぎんのも忘れるくらい楽しむ！　これのどこに不満があるってんだ！？」

「へっ、うっせーよ。俺の勝手だろ」

「はぁ……。アンタさぁ、変わろうとしたんじゃなかったっけ？　まーたアタシらを引っ掻き回すつもり！？」

「……」

「ねーぇ、どーなのよー？」

「……あーやめやめ！　ったくお前ら、何しに来たんだよ！？」

「くすん、ケンカしちゃイヤだよぉ……」

「あーゴメンねゴメンね！　もう大丈夫だから泣かないで～！　ほらっ！　アンタも謝る！」

「ふん……。悪かったよ。ごめんな」
「あら、ずいぶんと素直ですのね。うふふ……やはり大切な存在が出来ると、優しい気持ちがあふれてくるものなのね」
「……くっ。べ、別にいいだろ？」
「あ～！　赤くなってる～！　照れちゃってカワイイんだぁ～♪」
「お、めっずらしいじゃねぇか。あいつが照れるなんて。……いいなぁ、幸せそうで。こっちまでムズがゆくなっちまうぜちきしょーめ」
「私もお兄ちゃんと一緒にいられるだけで幸せだぅ♪　はぐ♪」
「……ホント、あっちもこっちもアッツイわねぇ。ね、そう思わなーい？」
「ええ……確かに目に余る部分も、多々ありますわね。ですが、それもよろしいのではなくって？　皆様を妬むより、あなたもよい殿方を見つけなさったらいかがかしら？」
「ちょっ……。からかわないでよお嬢！」
「お……お嬢……ですって？」
「おーいお前ら、そろそろ聞いてくれや。提案なんだが、夕方5時までは自由行動としたい。それまではどこに行っても自由だ。5時になったらここに集合する事！」
「出たわよー、仕切り屋さんが」
「そこうるさい！　あとは……これだけの大人数でゾロゾロ行ってもアレだから、ある程度の組分けをするぞ。まぁ、9人なわけだし、必然的に3組ほどに分かれる事になるんだろうが」
「となると、各カップルに1人ずつ……ってとこね」
「いんや、何もそれに限らなくともいい。あくまでもある程度だからな」
「ん～じゃあ、アタシは双子ちゃんと一緒に行かせてもらうわ。いっつも一緒だもんね！」
「オレは……やっぱお前と一緒になるのかな？」
「あら……でしたら私は、変な虫から彼女を守る為にここに入らな

ければいけませんわね」
「変な虫ってオレの事！？」
「あなた以外にどなたがいらっしゃって？」
「そりゃねぇぜ～。ま、それはそれとしてだ。これで3組に分ける事が出来たから、今から解散！　もう一度言うけど、5時になったらここに戻ってくるんだからな！」
集団の中で一番の長身の彼……圭輔が言う。
その言葉を皮切りに、彼らはそれぞれの行動を取る事になった。

期せずして2人きりにされた彼ら……周一と芽衣は、とあるアトラクションの順番待ちをしていた。
そこで彼女は、出来るだけ自然に彼に話しかけてみた。
「……2人っきりだね？」
「ああ、そうだな」
「みんなボク達の事、気遣ってくれたのかなぁ？」
「そりゃどうかな。アイツらにそんな気が回るのかどうか……」
「う～ん……。あ、そろそろボク達の番だよ！」
「ん？　もうここまで来たか。しっかし遊園地なんて久しぶりだな……」
「これってねぇ、凄いんだって！　なんか途中で水の上通るから、びしょ濡れになっちゃうんだって。あの時と……同じくらいかな？」
「は？　マジかよ！　そんな事は早く言えって！　またあんなに濡れるのは勘弁だぜ」
「大丈夫！　ほら、2人分あるよ。こっちはシュウくんのね、はい」
「準備いいなぁ、お前。ありがたく借りとくよ」
芽衣の差し出したレインコートを着込んで、アトラクションに乗る2人。
この『レインフォール』というアトラクションは、途中水の上を突き抜けていくため、水対策をしていないとずぶ濡れになってしまう。

しかし芽衣は事前に下調べをしており、２人分のレインコートを準備していたのだ。
よって２人は、若干顔に水がかかる程度で済んだ。

「あ～、おもしろかったね～！　じゃあ次は何にしよっか？」
「……え？　あ、次な……。めんどくせぇからお前に任せるよ」
「え？　ボク任せでいいの？　シュウくん、何か乗りたいのってないの？」
「別に……。ただな、お前を満足させてやるには、お前がやりたい事をさせてやる事だと思うから……」
「そんな事ないよー。変に気ぃ使われてもボク満足しないモン」
「じゃあどうすりゃいいんだよ！？　俺が選んでもお前を満足させられないかも知れないし、したらお前は気を使われても満足しないって言うし……！　わかんねぇよ！」
「……そんな風に考えないで。遊ぶのにどうしたらいいとか、こうしなきゃダメだなんてないんだから……。ボクは、シュウくんと一緒に楽しく過ごせればそれでいいんだから」
言い終わると同時に、彼女は周一の腕に自分の腕を絡ませる。
「そういうもん……なのか？　はぁ、女ってのはよくわかんねーな」
「う～ん……。女の子みんながこうだとは思わないけど、少なくともボクはそうだよ」
芽衣は周一の顔を下から覗き込むようにして、さらに続ける。
「ボクは、シュウくんと一緒にいられるだけでいいんだから、何をやるかってのは二の次なの。だから何を選んでもいいんだよっ」
「じゃあ……お言葉に甘えさせてもらうか」
「うんっ！」
２人は腕を絡ませたまま、次なるアトラクションへと向かっていった。

そして夕方５時。９人は指定された場所に集合していた。

「よし、全員集まったな。ここからはみんなで動こう。そろそろパレード始まるみたいだから、それは全員で見たいからな」
「また出たわ、仕切り屋が」
「だーら！　そこうっさいっての！　……ゴホン。もちろん、都合が悪いとかでもう帰らなきゃならんってのがあるなら無理に引き止めはしないけど、どう？」
　圭輔は全員に尋ねてみたが、それに反応する者はいなかった。
「ま、そりゃそーか。ここに来てパレード見ずに帰っちまうなんざ、ファミレスで水しか頼まないのと同じ事だもんな」
「確かにねー。……でもその例えってどうなのよ？」
「気にすんなよ。んじゃ行こうか。早めに行っとかないと、いい場所で見れないからな」
　全員を先導する形で圭輔が一歩先に出る。他の者もそれに続いた。

　程なくして、オーシャンズオリエント名物であるパレードが始まった。
　夜空を彩る無数の花火と、見る者の目を奪う豪華なイルミネーションは、さながら彼らを魔法の世界へ誘うかのよう。
　このパレードがあるからこそ、ここが世界的に有名になったと言っても過言ではないだろう。
「……っはー、やっぱいつ見てもすっげぇよなぁこれは」
「いや、これは凄いのレベルを超越してるだろ」
「ま、オレが早めに行って場所を確保しようって提案しなかったら、こんな近くで見れることもなかったんだろうけど」
「はーいはい、何もかもアンタのおかげですよー、あんがとさん」
「きれい……」
「そうだね……。このままずーっと見てたいね」
「ですが……、少々お金を使いすぎではありませんこと？　夢のない事を言うつもりはありませんが、私にはどうしてもそう見えてしまいます」

「それはそうだろうけどさぁ～、ボク達に楽しんでもらうようにやってるんだから、いいと思わない？」
「まぁ……いいんじゃないのか？　見てて嫌じゃねーし」
皆が思い思いの事を口に出している中、芽衣は周一のジーンズのポケットの中に何かを突っ込んだ。
彼はすぐにそれに気付き、芽衣に尋ねた。
「なぁ、今何か入れたろ？」
「あ……。うん、入れたよ」
「何入れたんだよ？」
「それは……ナイショだよ。帰ってから見て」
「……今じゃダメなのか？」
「うん。ボクからのお願いだよ。いいでしょ？」
「あ……ああ。まぁ、お前がそこまで言うんなら、言葉通り帰ってから見てやるよ」
「ありがとう……。シュウくん、大好きだよ……」
「ん……」
身を寄せてきた彼女の肩に手を置き、しばし眼前の光に見入る周一。
芽衣は時折、何かをつぶやいているようにも見えたが、誰もその声を聞くことはなかった。

全員の視線は、目の前のイルミネーションに完全に奪われてしまっている。
幻想的な雰囲気。
吸い込まれそうな光景。
永遠とも思える時間は、いつしか音に変わり、彼らの中で少しずつ奏でられていくのであった。

日付が変わろうかとしている夜更け、周一は芽衣から渡されたも

のを見るためにポケットをまさぐった。
どうやらそれは一枚のメモ用紙のようだ。
そこに書かれていたものは……。

秘めた想い　音に乗って
いつかあなたに　とどきますように……

気づけばいつも　ためいきばかり
思い悩んで　つい出てしまう
部屋の窓から　夜空を見ても
答えなんか　教えてくれない

あなたは　どこを見ているの？
わたしのことは　見えているの？
わからないまま　わたしは迷う

見つめあって　ふれあって
少しずつ　はぐくまれた
胸にのこる　Ｍｙ　ｐｕｒｅ　ｓｏｕｌ
きっとあなたに　とどくはずだから……

家に戻ると　いつでも１人
音も聞こえぬ　寂しき部屋（せかい）
ふとんの中に　もぐってみても
望みなんか　叶うはずない

あなたは　何を聞いているの？
わたしの音は　聞こえているの？

確かめぬまま　わたしは惑う
※見つめあって　ふれあって
隠すこと　出来なくなった
いつか奏でる　Ｐｒｅｃｉｏｕｓ　ｍｅｌｏｄｙ
あなたのもとへ　とどいたらいいな……

※Ｒｅｐｅａｔ
あなたのもとへ……

「……なんだこりゃ？　歌の歌詞みたいだけど……。でも何て言えばいいんだ……？」
言うが早いが、彼は携帯に手を伸ばし、芽衣に電話をかけた。
「もしもし、芽衣か？　夜遅くに悪いな」
「あっ、シュウくん！　もしかして、あれ見てくれたの？」
「あぁ、見たぞ……ってか何なんだあれは？　なんかの歌の歌詞か？」
「まぁ、そんな感じ。曲作れないから歌詞だけなんだけどね」
「……え？　まさかあれ、お前が作ったの？」
「そうだよ？」
「凄いな……。そう言や、これのタイトル……ってか曲名って何だ？　書かれてなかったぞ？」
「あっちゃ～、いっけなーい。書き忘れちゃった」
「ったく仕方ねぇなお前は……。で？　曲名は？　無題なんて言わないよな？」
「むにぃ、そんな事ないよぉ……。えっとねぇ……。その歌の名前は……」

—fin—

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1194o/

Precious Melody

2011年1月11日23時13分発行